

特別 無量光院跡発掘調査報告書XV
史跡

—— 第36次調査 ——

2019

平成31年3月

平泉町教育委員会

特別
史跡 無量光院跡発掘調査報告書XV

—— 第36次調査 ——

2019

平成31年3月

平泉町教育委員会



全景（東から）



全景（北から）



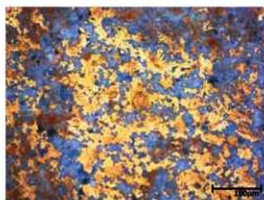
36 S D 1 断面11-12



扇骨 (No.128: S D 1 B 10層下出土)



金付着陶器 (常滑:No.82)



No.82顕微鏡写真 (国立科学博物館 寄名 貴彦氏提供)

序

町内には、特別史跡中尊寺境内・毛越寺境内附鎮守社跡・無量光院跡、史跡柳之御所・平泉遺跡群、達谷窟、金鶏山、特別名勝毛越寺庭園、名勝旧親自在王院庭園・おくのほそ道の風景地など奥州藤原氏に関連する数多くの国指定文化財が狭小な市街地に分布しています。

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』文治五年(1189)九月十七日条の「寺塔已下注文」に、奥州藤原氏三代秀衡が宇治平等院を模して建立したと併せ、藤原氏の政庁「平泉館」との位置関係が記されています。

無量光院跡は、大正11年に国の史跡に指定されました。昭和27年には、文化財保護委員会(現文化庁)が発掘調査を実施し、『吾妻鏡』の記載が裏付けられるとともに宇治平等院との類似性・相違点が明らかになりました。その調査成果から、昭和30年には特別史跡に指定されています。

当町では、遺跡の重要性に鑑み平成5年から地元の方々のご理解とご協力を得ながら公有化を進め、史跡の恒久的な保存措置を図っております。平成14年度からは史跡整備を視野に入れ、整備に資する資料収集を目的とした本格的な内容確認調査を継続的に実施しております。

本報告書は平成29年度に実施しました第36次調査成果を収録したものです。本次調査では、無量光院跡北東端を区画する堀が見つかり、堀は無量光院跡造営時に構築され、小規模に造り替えた事が確認されました。北側に隣接する柳之御所遺跡でも堀の造り替えがあることから、無量光院跡と柳之御所遺跡との一体性を考える上で貴重な資料を得ることができました。

特別史跡無量光院跡保存修理事業につきましては、公有化にご協力いただきました皆様、地域住民の方々、ご指導・ご助言をいただきました文化庁・岩手県教育委員会・平泉遺跡群調査整備指導委員会・宗教学人毛越寺をはじめとする関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成31年3月

平泉町教育委員会

教育長 岩 渕 実

例 言

- 1 本書は平成29年度に国庫補助事業より実施した特別史跡無量光院跡第36次調査の報告である。
- 2 野外調査期間は平成29年8月1日から平成29年11月17日までである。室内整理期間は平成30年3月30日までである。
- 3 調査地点は岩手県西磐井郡平泉町平泉字花立地内である。調査面積は約160㎡である。
- 4 発掘調査の主体は平泉町教育委員会である。

平泉町教育委員会

教 育 長 岩 淵 実

平泉文化遺産センター

所 長 及 川 司

主任主査(兼) 高橋 国博 補 助 員(臨時) 千葉 京子

主査文化財調査員 島原 弘征 補 助 員(臨時) 熊谷 明美

主査文化財調査員 菅原 計二 補 助 員(臨時) 菊地 道子

主査文化財調査員 鈴木 江利子

主 事 那 須 駿 也

文化財調査員 鈴木 博之

- 5 発掘調査・室内整理は及川の指導のもと、島原・鈴木(江)が担当し、熊谷・菊地の協力を得た。事務は高橋が担当した。
- 6 本書の執筆は、島原・鈴木(江)が担当した。編集は島原が行った。
- 7 遺構の名称については、本書内では次のように使用する。
本堂跡のある島を「中島」、本堂跡の東にある中島を「東島」、本堂跡北側で検出した小島を「北小島」とする。
- 8 調査の基準点は平成15年に無量光院内に設置した基準点(平面直角座標X系に準拠)をもとに調査員が打設した。
- 9 土層観察の土色は『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄2001)によった。
- 10 調査成果の一部については、現地説明会(平成29年10月21日開催)、平泉遺跡群調査整備指導委員会、平成29年度平泉文化フォーラム、平成29年度平泉町内遺跡調査報告会等で公表している。上記と内容と異なる場合は本書が優先する。
- 11 発掘調査及び室内整理にあたっては、次の方々ならびに機関からご指導とご協力を賜った(順不同・敬称略)

井上雅孝、及川真紀、杉本宏、菅原孝明、鈴木弘太、富島義幸、羽柴直人、本澤慎輔、前川佳代、村上拓

宗教法人毛越寺、文化庁、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 12 出土遺物及び写真・図面等の調査に関する資料は平泉町教育委員会が保管している。
- 13 発掘調査参加者(順不同・敬称略)

及川勝、小野寺光子、小野寺友子、小野寺美恵子、小山翔太、加藤照男、菊地道子、熊谷明美、小松代代、佐藤潔、佐藤参、佐藤正志、菅原まつ子、菅原有利、高橋春美、千條あえ子、千葉勝也、千葉セツ子、千葉晃久、千葉ナカ子、千葉光春、千葉みよ子、千葉義男、丸山聡子、真山宗雄、矢崎木綿子、吉田琴子

目次

I 位置と環境	1	1 検出遺構	2
II 調査の概要	2	2 調査概要	2
調査目的	2	3 出土遺物	31
III 調査成果	2	IV まとめ	34

表目次

第1表 無量光院跡調査履歴	3	第8表 土壁観察表	33
第2表 かわけ観察表	25	第9表 木製品観察表	33
第3表 中国産陶磁器観察表	31	第10表 金属製品観察表	34
第4表 国産陶器観察表	32	第11表 煙管観察表	34
第5表 須恵器観察表	32	第12表 鉄滓観察表	34
第6表 土師器観察表	32	第13表 銭貨観察表	34
第7表 羽口観察表	33		

図版

第1図 平泉町の位置	1	第10図 36-12断面図	23
第2図 位置図	1	第11図 出土遺物(1)	24
第3図 無量光院跡第36次遺構配置図	7	第12図 出土遺物(2)	25
第4図 36次調査区平面図	15	第13図 出土遺物(3)	26
第5図 36-8・9平面図	16	第14図 出土遺物(4)	27
第6図 36-5・8・9断面図	17	第15図 出土遺物(5)	28
第7図 36-5平面図	19	第16図 出土遺物(6)	29
第8図 36-10	21	第17図 出土遺物(7)	30
第9図 36-12・13平面図	22	第18図 出土遺物(8)	31

写真図版

写真図版1 調査区全景	38	写真図版11 36-12(1)	48
写真図版2 36-5(1)	39	写真図版12 36-12(2)	49
写真図版3 36-5(2)	40	写真図版13 36-13	50
写真図版4 36-5(3)	41	写真図版14 出土遺物(1)	51
写真図版5 36-8(1)	42	写真図版15 出土遺物(2)	52
写真図版6 36-8(2)	43	写真図版16 出土遺物(3)	53
写真図版7 36-9(1)	44	写真図版17 出土遺物(4)	54
写真図版8 36-9(2)	45	写真図版18 出土遺物(5)	55
写真図版9 36-9(3)	46	写真図版19 出土遺物(6)	56
写真図版10 36-10	47		

I 位置と環境

1 無量光院跡の位置

平泉町は岩手県南部、北上川中流域に位置する人口約7,700人、面積約64平方kmの小さな町である。南は一関市、北は奥州市に接している。12世紀には奥州藤原氏の拠点として栄え、中尊寺や毛越寺庭園を始めとする数々の文化財が残り、往時をしのばせている。

無量光院跡は北上川右岸の町の中心域に所在する。遺跡の中心は、JR東北本線平泉駅から北西約500m、周辺には水田や住宅があり、鉄道や県道が横断している。



第1図 平泉町の位置

2 無量光院跡の現状

平泉は平安時代末の約100年間、東北地方を勢力下に置いた奥州藤原氏の拠点であり、当時の痕跡を多く残している。その一つである無量光院跡は、奥州藤原氏三代目の秀衡が建立した寺院跡である。

無量光院跡は、南側を除いた三方を土塁で囲まれ、その内側には梵字が池と呼ばれる池跡と、大小三つの島が（中島・東島・北小島）設けられている。また、西側は土塁の外側に沿って堀が設けられており、現在でもその痕跡を見ることができる。境内の規模は、鉄道と県道によって3分割されている関係で分かりにくいですが、南北約320m、東西約240mを測る。

昭和27年に文化財保護委員会（現在の文化庁）が行った発掘調査によって、中島には阿弥陀堂の跡



第2図 位置図

が、東島から3棟の建物跡が確認された(1次調査:以後1次調査と略す)。建物は失われたものの、島の礎石は当時の建物の位置や規模を示し、周辺の休耕田部分は「梵字が池」と呼ばれる池の跡として平坦地を形成し、当時の面影を伝えていた。地形から推定される池の広さは東西約140mを測る。しかし、一見すると旧耕田の中に島状の高まりが大小二つ、東西に並んだ状況でしかなく、説明がないと来訪者にはわかりにくい状態であった。

無量光院の中心である中島と東島は、毛越寺の所有地である。池の跡や周辺は寺領ではなく、住宅や水田として使用されていた。管理団体である平泉町は鉄道と県道に挟まれた中央部分の住宅地や水田を公有化し、平成24年度からは池跡部分を中心に整備工事を開始した。平成26年度には東島及びその周辺、27年度には中島、28年度には北小島の整備が行われ、以前に比べて東島・北小島が視認しやすくなってきており、様相は変化してきている。

参考文献

- 文化財保護委員会1954 無量光院跡 埋蔵文化財発掘調査報告第三
- 平泉町教育委員会1993 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第34集(3次)
- 平泉町教育委員会1995 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第47集(4次)
- 平泉町教育委員会1999 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第73集(5~7次)
- 平泉町教育委員会2000 平泉遺跡群発掘調査略報 岩手県平泉町文化財調査報告書第73集(8~10次)
- 平泉町教育委員会2003 特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第83集(12次)
- 平泉町教育委員会2004 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅰ 岩手県平泉町文化財調査報告書第87集(13次)
- 平泉町教育委員会2004 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第85集(14次)
- 平泉町教育委員会2005 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅱ 岩手県平泉町文化財調査報告書第91集(15次)
- 平泉町教育委員会2005 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第92集(16次)
- 平泉町教育委員会2006 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅲ 岩手県平泉町文化財調査報告書第99集(17次)
- 平泉町教育委員会2008 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅳ 岩手県平泉町文化財調査報告書第107集(18次)
- 平泉町教育委員会2009 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅴ 岩手県平泉町文化財調査報告書第109集(19次)
- 平泉町教育委員会2010 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅵ 岩手県平泉町文化財調査報告書第113集(20次)
- 平泉町教育委員会2011 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第116集(21次)
- 平泉町教育委員会2011 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅶ 岩手県平泉町文化財調査報告書第115集(22次)
- 平泉町教育委員会2012 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅷ 岩手県平泉町文化財調査報告書第117集(23次)
- 平泉町教育委員会2013 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅸ 岩手県平泉町文化財調査報告書第119集(24次)
- 平泉町教育委員会2014 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅹ 岩手県平泉町文化財調査報告書第121集(25次)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2015 無量光院跡第26次・花立Ⅰ遺跡第30次・花立Ⅱ遺跡第24次発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第631集
- 平泉町教育委員会2015 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第124集(27-29次)
- 平泉町教育委員会2015 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅺ 岩手県平泉町文化財調査報告書第123集(28次)
- 平泉町教育委員会2016 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅻ 岩手県平泉町文化財調査報告書第125集(30次)
- 平泉町教育委員会2017 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅼ 岩手県平泉町文化財調査報告書第127集(33次)
- 平泉町教育委員会2018 特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅽ 岩手県平泉町文化財調査報告書第127集(34次)
- 平泉町教育委員会2019 平泉遺跡群発掘調査報告書 岩手県平泉町文化財調査報告書第132集

第1表 無量光院跡調査履歴

次数	主体	原因	史跡指定地内	期	間	面積㎡	内 容
1	文化財保護委員会	内容確認	○		S270804 ~0903		「吾妻鏡」により、宇治平等院を模して建立されたとの記述を裏付けた調査 ・平等院との類似性、相違点が明確化。 ・本堂と翼廊の規模が明らかとなる。臨海式翼廊付阿彌陀堂、本堂の規模が平等院と類似。 ・本堂の東側の島（東島）で3棟の礎石建物を確認。 ・現状変更（建物建替）に伴うトレンチ調査。 ・東岸と地層界を抽出。
2	岩手県教育委員会	住宅増築	○				・圃池としての明確な遺構は抽出されず。 ・地山傾斜面と灰色粘土質層は圃池の可能性を残している。
3	平泉町教育委員会	住宅増築	○		H040924 ~0930	5.5	・西側土塁と北側土塁が繋がっていた可能性を指摘。 ・北側土塁の北斜面の平場から、波板状凸凹を伴う12世紀後半の道路跡を抽出。
4	平泉町教育委員会	駐車場造成	○		H061205 ~1226	55	・丹戸状遺構から多数のちゅう木が出土。 ・土塁版築層の構築年代を12世紀第3四半期後半から第4四半期前半と推定。
5	平泉町教育委員会	住宅改築			H100629 ~0729	190	・東側土塁版築層の基底部と思われる整地地層界を確認。時期は12世紀第3四半期後半。 ・掘削が遺跡の張り出し地山に向かう道路跡を確認。
6	平泉町教育委員会	車庫新築			H100817 ~0910	47	・掘跡1条、溝1条、土坑1基、柱穴58個を抽出。
7	平泉町教育委員会	住宅改築			H101009 ~1125	300	・孤立柱建物1棟、柱穴2列、特殊遺構2基、溝11条、土坑6基を抽出。 ・特殊遺構とされた1基は、周溝状の溝で平円に区画された遺構。内部にこの遺構に付随すると思われる5個の柱穴が抽出されており、宝篋に相当する遺構と考えられている。 ・もう1基の特殊遺構は、方形周溝に囲まれ、内部に壁柱穴を伴う方形の竪穴建物である。形記に関連した遺構と推定されている。
8	平泉町教育委員会	住宅新築	○		H110402 ~0707	610	・北側土塁に相当する部分で、傾斜面を平坦化する整地地層を確認。地層は深いところ約3mに及び。 ・北側土塁北の大走り状の部分から、幅約1.5mの石敷道路遺構を抽出。緑石は単大、内部は単大。その上部を細線で塞ぐ工法。 ・7次調査の南側隣接地。同調査で抽出された竪穴建物の南半を抽出し、全容が明らかとなる。
9	平泉町教育委員会	擁壁建設			H110715 ~0831	154	・他に孤立柱建物1棟、溝2条、土坑11基を抽出。 ・竪穴建物は3.35×3.35mの略方形。深さ0.35mを測る。内部に2×3間の壁柱穴を確認。また、竪穴建物は6.3×7.0mの隅丸形状の周溝に囲まれている。周溝の規模は幅0.4m、深さ0.5mを測る。
10	平泉町教育委員会	物置新築			H110901 ~1018	220	・土塁より古い溝1条と土坑2基を抽出。 ・土塁の断面観察の結果、版築状に地山粘土を積み上げた状況を確認。 ・土塁下の旧表土層からロクロかわらけの一括廃棄遺構を抽出。
11	平泉町教育委員会	駐車場造成			H120605 ~0825	350	・西側土塁の基底部を確認。 ・柱穴を抽出。
12	平泉町教育委員会	内容確認	○		H141101 ~150314	932	・池跡に非常に浅く、遺物包含層がないことを確認。 ・池底を平坦にするための整地地層の一部確認。 ・池底から遺構は確認されない。 ・東島は地山を掘り残したものであること、景石は根石等が確認されていないことから、直に設置されていた州浜の磐石と思われることを確認。 ・東島の東の調査。 ・表土から20cm下で地山（池底）を抽出。遺物包含層は認められない。 ・ただし、北側に向かうにつれて若干深みを増す傾向が認められ、周辺に池灰の存在が予想されている。
13	平泉町教育委員会	内容確認	○		H150513 ~1219	2900	・中島（本堂跡）の東側（阿正面）に南北方向に並列する2列の柱列（4個×2列）を抽出するも、構脚に関連するものではないと判断されている。 ・中島の北側から構脚の抜き取り痕と思われる柱穴を抽出。 ・中島の北側で打籠の遺跡を行う。周辺では礎石は抽出されていない。
14	平泉町教育委員会	住宅増築			H150723 ~0731	32	・無量光院跡の南辺に位置する。南側土塁、堀跡の存在が予想される地域である。狭小な調査区であったが、土塁、堀跡は抽出されず。 ・13次に従って池底の追跡調査を行うも、池底は確認されず。
15	平泉町教育委員会	内容確認	○		H160910 ~1203	549	・圃池北西地域から、竪穴建物、溝、土坑、柱穴を抽出。柱穴は建物を構成する柱穴の一部と推定される。柱穴どうしの重複はない。 ・周辺に整地層を確認。西側土塁の基底部と推定される。 ・中島（本堂）を中心に南北対称の位置から、第7次で確認された竪穴建物と類似する遺構を確認。ただし、周溝は抽出されていない。 ・中島の北側、北翼廊西側礎石列の延長部で北側に延びる構脚の柱穴を抽出（南北柱間2.4m、東西柱間3.0m）。
16	平泉町教育委員会	物置建替			H161022 ~1116	41	・12世紀後半と推定される地層界を確認。 ・12世紀後半以降と推定される建物を構成する柱穴の一部、溝、土坑を抽出。 ・12世紀後半の瓦、かわらけ、陶器片、羽口が出土。 ・17世紀以降の溝2条、肥前産磁器が出土。

次数	主体	原因	史跡指定地内	期間	面積㎡	内容
17	平泉町教育委員会	内容確認	○	H170613 ～1102	270	・本京北側東縁の延長線上に横溝跡を検出(1×4間)。 ・横溝跡の北側に小島(仮称:北小島)を検出。平等院との類似性がさらに補足される。 ・奉大の円礎が池底付近の埋土から多数出土。
18	平泉町教育委員会	内容確認	○	H180605 ～1204	800	・本京西側から北側にかけての池の範囲が明らかになった。 ・池北岸と北小島とをつなぐように、土手状の高まりが設けられていることを確認。平等院との類似性がさらに補足された。 ・導水の濾過装置と推定板を覆う落ち込み遺構を検出した。 ・土塁状の高まりの下に板が埋設されていることを確認した。導水に関係する木桶の可能性も想定される。 ・池底、池岸には認められない。
19	平泉町教育委員会	内容確認	○	H190615 ～1110	700	・本京北側の池の範囲が明らかになり、池の範囲が一部県道北側にまで及ぶ可能性が出てきた。 ・導水の可能性の高い溝跡を確認。 ・18次調査で確認した、板の遺跡を行ったが、板の下部に掘り込み等の痕跡は認めなかった。 ・県道際で道路側溝と思われる近世の溝跡1条を確認。奥州道中に関連する溝と思われる。
20	平泉町教育委員会	内容確認	○	H200602 ～1031	700	・池跡の北東から東の行跡を検出し、池跡は現地形と異なり北に張り出して県道北側まで広がる事が確認された。 ・県道より北側では溝や柱穴などの遺構を検出した。柱穴の中には整地以前のものもあり、無量光院以前から、何らかの土地利用されていたことが確認された。
21	平泉町教育委員会	住宅新築		H210512 ～0601	150	・周溝を伴う堅穴建物1棟、溝3条、柱穴30個を検出。 ・堅穴建物は、西側が調査区外のため内容は不明だが、南北3.35m、東西1.42mを測り、壁柱穴を伴っている。この堅穴の外側を幅31～86cm、深さ6～12cmを測る溝が円形に巡っている。この堅穴建物は7次調査のものに類似しているが、周溝が円形形状を呈している点が若干異なる。 ・周溝に区画された範囲は南北で約8.14mを測る。なお、東西方向は調査区外を含むため不明だが、確認した範囲で約4mを測る。
22	平泉町教育委員会	内容確認	○	H210615 ～1221	700	・池東側と南側の岸を確認した。 ・今年度までの調査で東西の岸を確認できたことから、無量光院跡の池の大きさは、東西約140mあることが確認された。また、池岸には石が葺かれていた様子はなく、池は浅いと思われる。 ・溝の痕跡は検出できなかったが、池底から用途・性格不明の掘り込みを検出した。 ・この掘り込みは幅2.8～3.5m、深さ20～30cmあり、池底を整える際に埋め戻されたものと考えられるが、性格は不明である。
23	平泉町教育委員会	内容確認	○	H220621 ～1221	500	・本京基壇周辺を巡る板石及び正面に敷かれた坪の広がりを確認し、再測量を行った。 ・ただし、北翼廊の一部で検出された板石を覆う基壇造成土の検証や坪の広がり範囲確認及び東端の石列との関係の確認などが課題として残されている。 ・中島東端から舞台と考えられる柱跡が検出された。
24	平泉町教育委員会	内容確認	○	H230704 ～1228	235	・本京基壇構造をおおよそ確認することができた。また、基壇表面には川原石を階段状に葺いていた。 ・「坪」の広がりには少なくとも東西方向2.7m、南北方向24mあることを確認した。
25	平泉町教育委員会	内容確認	○	H240720 ～1228	290	・昭和27年の一次調査で確認された東島に所在する礎石建物3棟の北平部を中心に再調査を行った。特に東方建物は、複数の建物に分かれる可能性がある。また、礎石建物より古い掘立柱建物を検出したが、礎石及び根石の下に広がること及び南側調査区外に広がっていることから規模は不明である。 ・中島北側の池岸から、脚及び人江を確認した。
27	平泉町教育委員会	施設建替		H250520 ～H260615	41	・無量光院跡南側の史跡外の調査。12世紀の溝跡分条と脚跡1列を検出したが、無量光院本体の輪礎とは異なり、無量光院跡に関連した遺構かは不明。
28	平泉町教育委員会	内容確認	○	H250617 ～H260314	300	・昭和27年の一次調査で確認された東島に所在する礎石建物4棟の南平部を中心に再調査を行った。特に東方建物は、複数の建物に分かれる可能性がある。 ・中島北側の池岸から、脚及び人江を検出し、規模・形状を確認した。
29	平泉町教育委員会	内容確認		H260317 ～H260331	54	・西側土塁南側の史跡外の調査。同土塁の斜面部分を検出。
30	平泉町教育委員会	内容確認	○	H260623 ～H261226	500	・東門調査区では、東門は検出されなかったが、表土下5cmで12世紀の整地層を検出し、無量光院造営時に大規模に造営されていたことが確認された。整地層の下から無量光院跡造営以前と考えられる幅7m、深さ1mの大溝を検出した。 ・北小島の大きさは東西15m、南北10.5m程度あること、高さが少なくとも30cmあることが確認された。

次数	主体	原因	史跡指定地内	期間	面積㎡	内容
31	平泉町教育委員会	施設建替	○	H260623 ～H260718	51	・無量光院跡の池（梵字が池）の北端部分の調査。 ・池底及び護岸の一部が検出された。護岸のラインは調査区北側に隣接する用水路（青線）と並行関係にあり、当時の地形が現在の境界に影響を与えている可能性を指摘。
32	平泉町教育委員会	内容確認	○	H261109 ～H261212	27	・電線共回溝本線から延びる引き込み線部分の内容確認調査。 ・大平が近代以降の道路側溝によって12世紀の遺構面が失われていたことが確認された。
33	平泉町教育委員会	内容確認	○	H27611 ～H271116	500	・中島の補足調査と東側土塁及びその東部の調査 ・中島の調査では本堂基礎が川原石に被覆されている独特の基礎意匠であることを確認した。 ・東側土塁は、無量光院造営時に盛られていることを確認した。 ・東側土塁の東部では、無量光院跡段階の柱穴と汚物壙東穴を確認した。また、その下層から無量光院以前の築地層を検出した。
34	平泉町教育委員会	内容確認	○	H280811 ～H281130	200	・無量光院跡北東端の調査 ・北東側を区画する堀跡2条を確認。堀跡は12世紀後半以降に同一箇所で開催に作り替えが行われていたことを確認。無量光院跡北隣に位置する柳之御所遺跡の堀跡も外側から内側への移行及び複数回の設置が認められ、同遺跡間との関連性が伺える。
35	平泉町教育委員会	住宅新築		H280523 ～H280728	147	・無量光院跡南西側の史跡外の調査。12世紀の東西軸の大溝跡を検出したが無量光院跡に伴うものかは不明。
36	平泉町教育委員会	内容確認	○	H290801 ～H291117	160	・無量光院跡北東端の調査 ・北東側を区画する堀跡2条を確認。堀跡は12世紀後半以降に同一箇所で開催に作り替えが行われていたことを確認。無量光院跡北隣に位置する柳之御所遺跡の堀跡も外側から内側への移行及び複数回の設置が認められ、同遺跡間との関連性が伺える。
37	平泉町教育委員会	住宅新築		H290531 ～H290801	110	・無量光院跡南西側の史跡外の調査。土坑、溝、焼土遺構、柱穴を検出。無量光院跡造営時の整地層下から12世紀前半のかわらけとともに擦文土器が出土。
38	平泉町教育委員会	住宅新築		H290802 ～H290824	75	・無量光院跡南西側の史跡外の調査。土坑、溝、柱穴を検出。

Ⅱ 調査の概要

1 調査目的

平成14年から開始した復元整備に伴う内容確認調査で、今年度は15年目にあたる。無量光院跡はこれまで、文化財保護委員会・岩手県教育委員会・平泉町教育委員会によって今回の調査を含め38回の調査が行われてきている。調査履歴は第2表に記したので参照願いたい。36次調査は、無量光院跡北東側の範囲確認を目的に調査を行った。

2 調査方法

グリッド 遺構実測や遺物出土地点の記録等の実測作業の基準として、無量光院跡全域に平面直角座標X系（測地2000）を元に20m四方のグリッドを設定し、それに基づき基準点を打設した。

なお、平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震において、調査区周辺では西北西方向に約20cm、平成23年3月11日に発生した東北太平洋沖地震によって、南南東へ約2.7mずれていることが確認された。よって、同地震以降に新規設置した基準点に関しては、変動前の数値（測地成果2000）に変換した測量成果を使用し、既存の測量成果との整合性をつけた。

粗掘・検出 遺構検出面まではスコップもしくは移植ベラで表土層を剥ぎ、遺構や層位の確認を進め、鋤簾等で遺構検出作業を行った。

精査 基本的には検出に留めた。ただし、遺構の年代・層序等を確認するため整地層・堀・溝は部分的にサブトレンチを入れ、土坑・柱穴は半裁までに留め調査を行った。

記録 遺構の実測は、平板測量もしくはグリッドを1×1mに分割したメッシュを用いて測量した。遺構写真は35mm版カメラとデジタルカメラ（ニコンD90）をメインカメラとし、遺構及び調査全景写真時には、メインカメラに加えて6×7版カメラ（リバーサル）で撮影を行った。

埋め戻し 山砂で遺構面を覆い、その上に調査で掘削した土を埋めた。

普及活動 調査地点は無量光院跡の観光客動線からは外れるものの、調査現場を見学する観光客に対応するため、現場は随時公開し調査に支障がない範囲で説明等を行った。調査終盤の平成29年10月21日に現地説明会を開催し50人の参加を得た。調査成果は、「広報ひらいらすみ」及び平成29年度平泉文化フォーラム、平成29年度町内遺跡発掘調査報告会等で公表している。

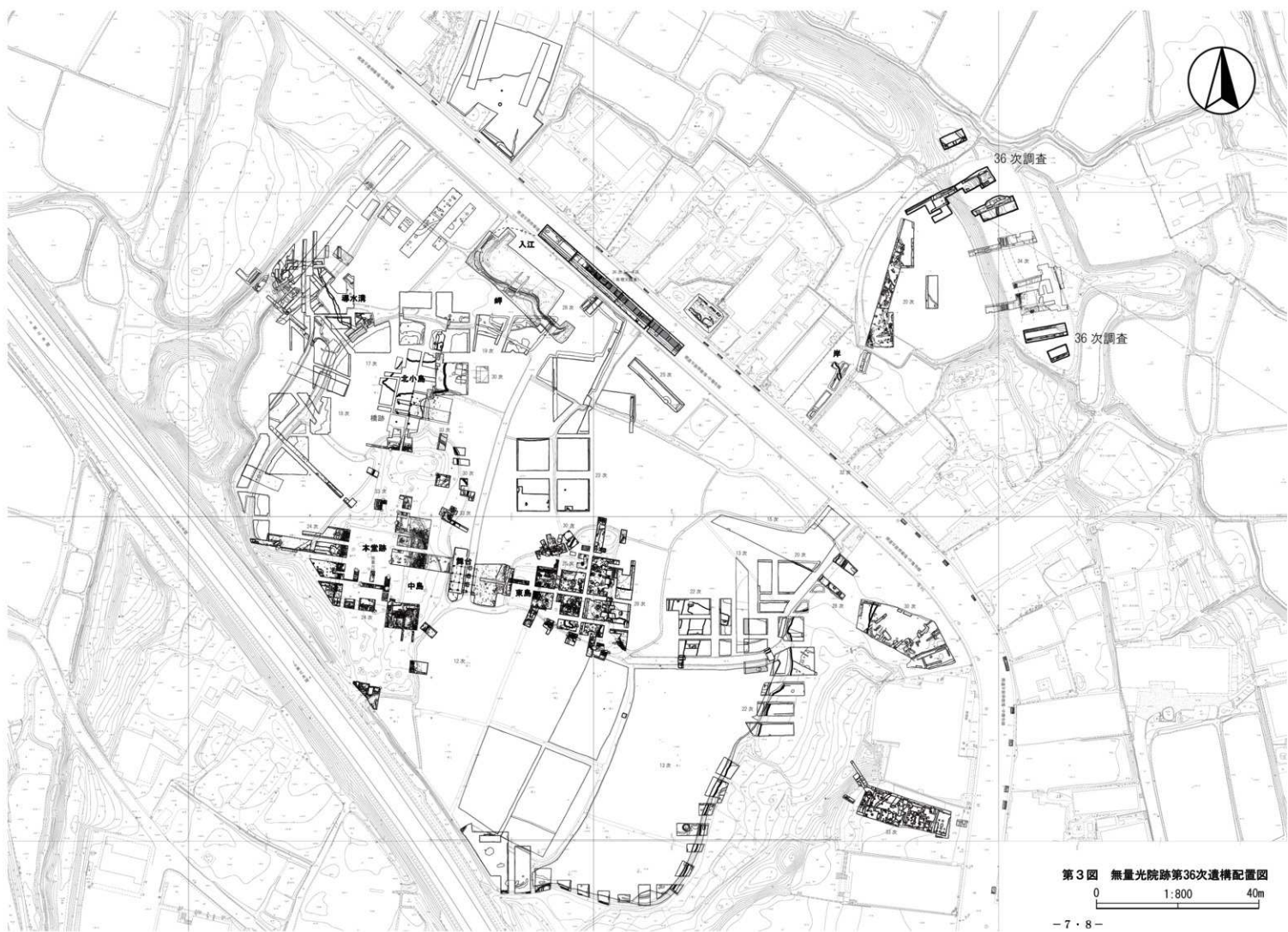
Ⅲ 調査の成果

1 検出遺構

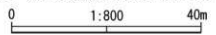
検出遺構は堀2条、整地層、柱穴8個である。

2 調査概要

無量光院跡北側土塁が現状で途切れる無量光院跡の北東側にあたる部分では、北側に隣接する猫間が淵を挟んで柳の御所遺跡と相対している。ここでは無量光院跡本堂や池跡がある面と猫間が淵の間にテラス状の地形があり、そこから猫間が淵に張り出しが設けられていた。上段が無量光院跡本体の面、中段がテラス状の地形と張り出し、下段が猫間が淵に相当する階段状の地形とも言える。今回の調査では34次調査で中段部分から無量光院北東側を区画する堀跡が検出されたことから、その堀跡を追跡するため、北側の延長線上に2本、南側に3本のトレンチを入れ、堀跡の位置と、上段を形成する整地層との関係を確認することとした。



第3図 無量光院跡第36次遺構配置図



○北トレンチ (36-8・9) (第6・7図、写真図版5～9)

西側は創建時の整地層を、斜面下方にあたる東側では堀跡(SD1A・B)を検出した。しかし、トレンチ中央から東側では、開田時の削平によって本来の緩やかな地形を失っており、中央は高低差2.3～2.4mを測る急傾斜で、それより東側は概ね水平になっていた。よって、基本的には遺構検出面まで掘削を行い、斜面上にあたる西側は整地層を、中央から東側では堀跡部分を部分的にサブトレンチで調査し、整地の範囲や堀跡の状況を確認する作業を進めた。西側の整地層は地山起源の淡黄・黄褐色粘土が10～60cm盛土されて、その下層には最大厚10cmの炭やかわらけ・陶器片を含む層(7層)が堆積し、腐植土を含む黒褐色粘土(14層)が堆積していた。

小トレンチ(断面15-16)内の地山は、斜面上位にあたる西側では検出できず、高位面と中位面の境、現況で法面となっている部分から東側を検出した。確認した面では24.9～26.04mを測り、東側に向かって低くなっている。西側の整地層上面は27.3m前後を測り、SD1Aを検出した中央から東側での検出面は24.75～24.92m、高低差1.29mを測る。

<整地層の考え方>元々は無量光院跡のある高位面から堀跡のある中位面に向かって緩く下る斜面を呈し、その上層に上位は灰黄褐色、下位は黒褐色粘土が堆積していた。

無量光院跡造営段階では、①3・20～22層、②24～26・29層、③42～46層、④38・39層の四工程で盛土されているようである。ただしP2～5はこの盛土上にあることに留意する必要がある。また、SD1Aを構築する際の盛土(6～8・14～22層)と①～④の整地層は一連ではなく、傾斜的にSD1Bの斜面もしくは同溝に伴う整地層(28・29・31層)が一体的に連続するような構築であった可能性が考えられる。ただし、整地が途切れる事及び遺物の出土量が少ないため明確ではなかった。

<柱穴>P2～4は整地層(38層)上面から、P6～9は整地層下の地山から検出した。前者は整地に伴う土留め杭、後者は整地以前の柱穴と考えられる。

<北側土塁があったのか>断面15-16で確認されている現代盛土の延長は約8m、盛土厚は平均40cmを測る。断面図上の面積は3.2㎡である。これに対して、同断面24a層から東側で明確な旧水田に伴う30cm程の段差があり、北側土塁の北辺となる可能性が想定される。この部分と20次調査の溝の間の距離は約10mを測るが、仮に北側土塁があった場合、土塁の高さは60cm程となる。仮に土塁があったとしてもかなり低かったと考えられる。

<出土遺物>高位面にあたる36-9では、かわらけや陶器、土師器などが出土している。北側のトレンチ部分では、調査範囲が狭いため遺物の出土量も少ないが、整地下層腐植土から、木片や鉢の体部下と思われる特殊かわらけ片(Na38)が出土している。西側寄りにある土坑の可能性のある箇所からは、かわらけ片と桃類の種が4～5個、4cm大の木片や土壁片が出土している。中位面に近い斜面に堆積した整地層中からはかわらけや土壁の出土が多い傾向があった。

中位面にあたる36-8では、かわらけ、中国産磁器、国産陶器、須恵器、羽口、木製品、種子、鉄製品、鉄滓等が出土している。同調査区東側には階段状になっていた水田を西側水田の高さに合わせて盛土し、水田を拡張した跡がある。ここから明治八年鑄造の竜1銭銅貨(Na172)が出土しており、この年代以降の整地である事が分かる。また煙管(Na163)も同地点から出土している。

○北トレンチ2 (36-5) (第5図、写真図版2～4)

36-8で確認した堀跡(SD1A・B)と34次調査北トレンチとの間に堀跡の位置確認の為に設定したトレンチである。トレンチが堀跡全体に含まれるよう設定し、堀跡の規模及び堆積状況を確認することを目的とした。

トレンチ周辺は、開田時の削平によって本来の緩やかな地形を失い概ね水平になっており、標高25.3

mを測る。検出面標高は24.76～24.90mで、東側に向かって若干低くなっている。基本的には遺構検出面まで掘削を行い、堀跡部分をサブトレンチで部分的に調査した。

調査の結果、SD1Aは上位が黄褐色粘土(10・11層)、下位が灰色砂を主体とした自然堆積を呈していた。SD1Bは大きく4つに大別され、上位はSD1A構築時の整地層(13～19層)、中位は自然堆積層(20～22層)、下位は自然堆積層(42～47層)が堆積し、斜面上位である西側では中位と下位の境に整地もしくは崩壊土(27～41層)が挟まれ、中位層に切られていた。問題は中位・下位の時間差であるが、下位の自然堆積層から出土したかわらけが少ないため、どの程度の時間幅なのか把握することはできなかった。なお、中位は灰色粘土、下位は緑灰～暗緑灰色が薄く層状に堆積しており、常時水が入る状態であれば堆積するスピードは速く、出土遺物から明確な時間差を提示できない以上、中位と下位の時間幅を求めない方が良いのかもしれない。

<出土遺物>かわらけ、中国産磁器、国産陶器、須恵器、土師器、羽口、土壁、木製品、釘状鉄製品、鉄滓が出土している。SD1Aの上に小規模な溝が通っており、かわらけの破片や、中国産白磁(No.54)、国産陶器(No.67・83)などが出土している。覆土は砂で、北側に向かって流れたと思われる。出土遺物の量からは12世紀でもおかしきはないが、水田耕作の下であり、SD1Aが埋まりきってからの掘り込みである。

○北トレンチ3(36-10) (第8図、写真図版10)

堀跡(SD1A・B)の延長を追跡調査するため36-8北側に設定したトレンチである。調査地点は北側土塁南端の東側に位置し、土塁と高位面から中位面に下る斜面が一体となり中位面がこの斜面に合流する形で収束する地点であった。上位層は現代の攪乱や水田層、中・下位は上位層からの崩壊土が混ざった自然堆積を呈し、礫混じりの地山面を確認した。地山は若干低位面である猫間が淵に向かって下る緩やかな斜面で、平坦であると言っても良い状況であった。あまりにも平坦調であること時期不明の流路を地山面で検出していることから、12世紀以降の洪水などの流水で削平を受けて失われている可能性がある。また、上位層の攪乱中から深さのあるSD1Bの痕跡も認められなかった事から、同溝は本調査区より南東側で低位面に合流する可能性が想定される。

<出土遺物>現代の茶碗やガラスなどが一括で出土した。中・下位は流路の影響による砂の堆積土中から僅かにかわらけの小片が少量出土したのみであった。

○南トレンチ1(36-12) (第9・10図、写真図版11～12)

昨年度調査した南トレンチで確認した堀跡(SD1A・B)の南側延長を追跡調査するため設定したトレンチである。調査地点は高位面と中位面が合流し一体的な斜面状になる部分の北側に位置する。また、前述の高位・中位面の境には用水路が入っており、その上流には無量光院跡の池排水路と用水路が重なる箇所があり、無量光院跡の排水関係を考える上でも重要な場所であった。トレンチ周辺は、開田時の削平によって本来の緩やかな地形を失い概ね水平になっていた。残念ながら、排水関係の遺構は確認されなかったが、堀跡の続きを検出し部分的にサブトレンチで堆積状況を確認した。

調査区付近では、現代の水田層が複数認められ、その下位には13・14層の灰黄褐色粘土・砂がラミナ状の堆積を呈し、その下には黒色～オリーブ黒粘土が水性堆積していた。その下層が遺構検出面であった。検出面標高は24.82～25.0mを測り、南西側に向かって若干低くなっていた。これはSD1Aが本トレンチから南北方向から北西～南東方向に変化しており、その関係で地山が北東から南東に向かって下ることが影響している。蛇足ではあるが、西側に隣接する用水路もSD1Aと同様の方向を呈しており、堀跡が完全に埋まりきる前に水性堆積が厚く堆積している要因はこの用水路(もしくはそ

の先行する水路)の影響があったのかもしれない。

SD1A・Bはこれまでと同様に同一箇所での作り替えが行われていた。用地の関係でサブトレンチが堀跡の東半分しか調査できなかったため、SD1Bについては底面までの調査は行わず堆積状況の傾向が分かる範囲での断面観察主体の調査に切り替えている。SD1Bについては崩壊土起源の砂や小石が混ざる緑灰～灰色粘土(34～37層)が堆積した上にオリブ黒～灰色粘土(30～32層)主体の水性堆積層が堆積し、その上位は人為的に埋め戻されSD1Aが構築されていた(6・16・29層:層位は断面21-22を記した)。ここまでの堆積状況は北側の様相と大筋で一致しているようである。SD1Aは暗灰黄～暗オリブ灰色粘土を主体とした自然堆積を呈していた。なお、断面21-22の44層から無量光院よりわずかに旧い形状のかわらけ(№16)が1点出土している。44層周辺はSD1Bより古くその下位の地山は起伏に富んでおり、現時点では整地層の可能性を考えている。この整地層はSD1Bより古いことから、それ以前に整地が行われていたのかもしれない。

<出土遺物>かわらけ、国産陶器、須臾器、羽口、土壁、木製品、種、鉄製品、鉄滓が出土している。SD1B上位から偶然の可能性もあるが合わせ口となったかわらけを出土している。№34のロクロ小内側に№33のロクロ小が伏せておかれた状態であった。

○南トレンチ2(36-13) (第9図、写真図版13)

36-12の南東側に設けたトレンチである。調査地点は高位面と中位面が合流し一体的な斜面状になる部分にあたる。ただし、トレンチ東側は、中位面より1段下の小さな水田がある。この水田が北にある張り出しに伴うものか、緩斜面のなごりかは検討を要する。SD1Aの続きを検出し、東端で整地層を確認した。

調査区付近では、現代の水田層が複数認められ、その下位には4層の灰白粘土ブロックを伴うにぶい黄褐色砂がラミナ状に堆積し、その直下で遺構検出面であった。なお、36-12で遺構検出面の直上にあった黒色～オリブ黒粘土を主体とする水性堆積層が確認されていない。これは検出面が36-12とは逆に西側から東側に下ることも影響しているのかもしれない。検出面標高は24.78～24.90mを測る。

36-13ではSD1Aを検出し、SD1Bは同一地点で重ならないようである。東端で12世紀の整地層を確認していることも大きな特徴である。この整地層を検出した当初はSD1Bを埋め立てた人為堆積土の可能性も考慮し調査を行ったのだが、位置的に一連の遺構として捉えるには困難のため、現時点では整地層として扱っている。その場合SD1Bがどのように収束するかが課題となるのだが、36-12と同13の間に掘削廃土をためる土山を設けていたため、調査をすることができなかった。

SD1Aは灰色～暗オリブ黒色粘土を主体とした自然堆積を呈していた。

<整地層>SD1A東側の地山は東側に位置する猫間が淵に向かって緩く下る斜面を呈し、その上層に上位は暗灰黄褐色砂(21・22・24・32層)、下位は浅黄～灰色粘土(それ以外の層)を主体とした整地層が堆積していた。地山の傾斜方向(東西方向)と36-12で確認されたSD1Bの方向(北西～南東方向)が相容れないこと、36-13で確認された整地層下の地山は起伏が激しく、堀の底面及び斜面を構成するには難しいことから、現時点では堀跡ではなく整地層として考えている。ただし、整地層の時期とSD1Bの時期が近いこと、同溝が限りなく直角に曲がり本トレンチの北側に展開するのであれば、この整地層はSD1Bに伴う整地とも言える可能性は残されている。

<出土遺物>かわらけ、中国産磁器が出土したが、表土からの出土で遺構に伴うものはない。なお、SD1Aから遺物は出土せず、堆積土中に流れ込んだ石のみであった。

SD1A (第5～7図、写真図版4・6・11・12)

<位置・検出状況>中央から北側(36-5・8)では概ねトレンチの中央を南北方向に延びている。南側では36-12から南北方向から北西-南東方向に方向を変え36-13を経由して猫間が淵のある低位面に連なる。なお、北側では36-10で確認されなかったことから、同トレンチの東側付近で低位面につながると思われる。<新田関係>SD1Bを埋め戻して作られているため、同遺構より新しい。<埋土>中央付近と南端では様相が若干異なる。中央付近(断面3-4)では上位黄褐色粘土(11・12層)、下位が灰色砂を主体とした自然堆積を呈していた。一方南端では灰色～暗オリーブ黒色粘土を主体とした自然堆積を呈していた。

<底面>北から南に向かうにつれて低くなり、高低差は9cmを測る。<出土遺物>青白磁合子(No.39)、褐釉陶器(No.48)、国産陶器(渥美:No.92)、須恵器甕(No.98)、羽口(No.109・110・116)が出土し掲載した。なお、かわかけは細片主体で手づくねとロクロ双方が出土しているが、実測可能な個体はなかった。

SD1B (第5～7図、写真図版3・5・11)

<位置・検出状況>中央から北側(36-5・8)では概ねトレンチの中央を南北方向に延びている。南側では36-12から南北方向から北西-南東方向に方向を変えるが、36-13ではトレンチ東側で整地層が確認されたのみで、36-13北側を経由して低位面に連なる可能性があるが明確ではない。なお、北側では36-10で確認されなかったことから、同トレンチの東側付近で低位面につながると思われる。<新田関係>SD1A構築時に埋め戻されており、同遺構より古い。<整地層との関係>断面11-12の通し断面から見てみる。SD1Aを構築する際の盛土(6～8・14～22層)と高位面(断面15-16)の整地層は一連ではなく、遺物の出土量が少なく明確ではないが、後述する埋土の状況からSD1Bと上位面の整地層は一連で一体的に整備されたと考えられる。

<埋土>断面3-4では大きく4つに大別され、上位はSD1A構築時の整地層(13～19層)、中位は自然堆積層(20～22層)、下位は自然堆積層(42～47層)が堆積し、斜面上位である西側では中位と下位の境に崩壊土(27～41層)が挟まれ、中位層に切られていた。問題は中位・下位の時間差であるが、出土遺物から明確な時間差を提示できない以上、中位と下位の時間差はあまり無いと判断している。ただし、崩壊土を切って中位層が堆積していることから、大規模な浚渫は行われたと判断される。なお、南側の36-12(断面21-22)では崩壊土起源の砂や小石が混ざる緑灰～灰色粘土(36～38層)が堆積した上にオリーブ黒～灰色粘土(30～32層)主体の水性堆積層が堆積し、その上位は人為的に埋め戻されSD1Aを構築していた(6・16・29層)。断面3-4の崩壊土中においてはシガラミ状に木片や枝が広がっていた範囲があり、周辺からはかわかけや陶器、木製品が出土していた。

<底面>南から北に向かうにつれて低くなり、高低差は65cmを測る。<出土遺物>手づくねかわかけ(No.1～6)、ロクロかわかけ(No.8～24・26～29・31・33・34・36)、中国産白磁碗(No.55)、国産陶器(渥美:No.86・93)、猿投(No.95)、羽口(No.106・107、111～113)、扇骨(No.128)木製碗(No.128・129)、箸(No.131～133)、曲物? (No.143・144)、形代か? (No.145)、椀形滓(No.164～171)が出土した。かわかけはロクロ主体ではあるものの、上位・中位においても手づくねが含まれていた。下位では破片主体ではっきりしないが、ロクロかわかけが主体であるものの、一部手づくねが含まれていた。中位からは木製品や羽口・漆器・鉄滓の出土が目立つ。

No.9のロクロ大(9)はどっしりと厚手であり、検出時には人為的なものではないと思われるが、内面に植物根が藁のような繊維が渦を巻く様に入っていた。中～下位出土のロクロ小の中で、No.24・26・28は底径が小さく、他のかわかけよりもやや古手の形状と思われる。

	全長(m)	幅(m)	断面形	深さ(cm)	方位	検出面標高(m)	底面標高(m)
36SD1A	[50.5]	[1.66]~[2.6]	逆台形	62~80	N-7° -E	24.87~25.00	24.12~24.22
36SD1B	[45.0]	6.0~9.6	半円形	105~216	N-20° -E	24.85~25.00	22.50~23.38

柱穴 (第5図、写真図版9)

〈検出状況〉高位面にあたる36-9を中心に検出している。P2~4は整地層(38層)上面で検出しており、整地層以後の柱穴と考えられる。列状になっていることから整地時の土留めに伴う杭である可能性がある。P5は後世の杭穴である可能性が高い。

P6~9は整地層下の地山から検出した。検出のみで精査は行っていないが、整地層最下層(47層)より下であることから、整地以前の12世紀の柱穴である可能性が高い。

3 出土遺物 (第11~18図、写真図版14~19)

今回の調査では、かわらけがコンテナ6箱、中国産陶磁器19点、国産陶器39点、土壁、木製品(椀2点、箸3点、形代1点、扇骨1点、曲げ物?2点)、鉄製品、鉄滓、植物遺体等が出土した。

かわらけ コンテナ6箱分出土した。SD1を主体としてその他遺構や水田層などから出土している。前者は中位層で残りがよいものが認められるが、それ以外では完形品や形の整ったものは少なく、ほとんどが摩滅し破損していた。No.9のロクロ大はどっしりと厚手であり、検出時には人為的なものではないと思われるが、内面に植物根か藁のような繊維が渦を巻く様に入っていた。SD1B上位から偶然の可能性もあるが合わせ口となったかわらけを出土している。No.34のロクロ小内側にNo.33のロクロ小が伏せておかれた状態であった。

中国産陶磁器 19点出土し、全点掲載した(Na.39~57)。12世紀の物であるが、攪乱や水田層からも出土しており、近代に周辺が攪乱された様子がある。原因の一つとして水田耕作の面を確保するために傾斜地を切り土盛土している事がある。

国産陶器 39点出土し、全点掲載した(Na.58~96)。中国産陶磁器と同様に、攪乱や水田層からも出土しており、近代に周辺が攪乱された様子が伺える。

須恵器 形に分かる5点(Na.97~101)を掲載した。水田層からの出土である。

土師器 形に分かる2点(Na.102・103)を掲載した。水田層からの出土である。

羽口 形に分かる14点(Na.104~117)を掲載した。SD1AもしくはSD1Bの中位層からの出土が多い傾向がある。なお、本調査区の北西側で行われた猫間が淵第2次調査⁽¹⁾では羽口と鉄滓が多く出土しており、ある時期に生産施設が周辺にあった可能性を伺わせるものである。

土壁 水田層や現代盛土中からコンテナ1/2箱分出土し、このうち10点(Na.118~127)掲載した。

木製品 コンテナ4箱分出土し、このうち27点を掲載した。特筆されるのはNo.128の扇の骨である。長さが46.4cmある大きい物で、出土状況は閉じられていたが、骨は3本である。根元側中央は幅6mmの木釘を用いて止めている。平泉で確認された扇骨は長さが20cm前後で7~10本のもの主体で、長さが40cmのものは柳之御所遺跡52SE8で出土したもののみである⁽²⁾。しかも柳之御所出土例は扇骨は4本で本例は更に少ない。実用的なものというよりは意匠的なものなのだろうか。他に椀2点(No.128・129)、箸3点(No.131~133)が出土し掲載した。No.143・144は曲物、No.145は形代の可能性がある。見つかった木製品はSD1Bの中位層や下位層からの出土がほとんどであった。同層では水分を含むことから枝や莖の様な植物遺体も含まれており、棒状・板状のものうち状態の良いものを中心に掲載している。

金属製品 水田層から現代のものを中心に出土しており、角釘および不明鉄製品を中心に8点(Na.155~162)を掲載した。

煙管 36-8より1点(Na.163)出土し掲載した。

鉄滓 コンテナ1／3箱分出土した。比較的形の分かる碗形滓(№164～171)を中心に掲載した。なお、碗形滓はSD1B中位層からの出土が多い傾向がある。

銭貨 36-8の近代盛土中から明治八年鑄造の竜1銭銅貨(№172)が1枚出土しており、掲載した。

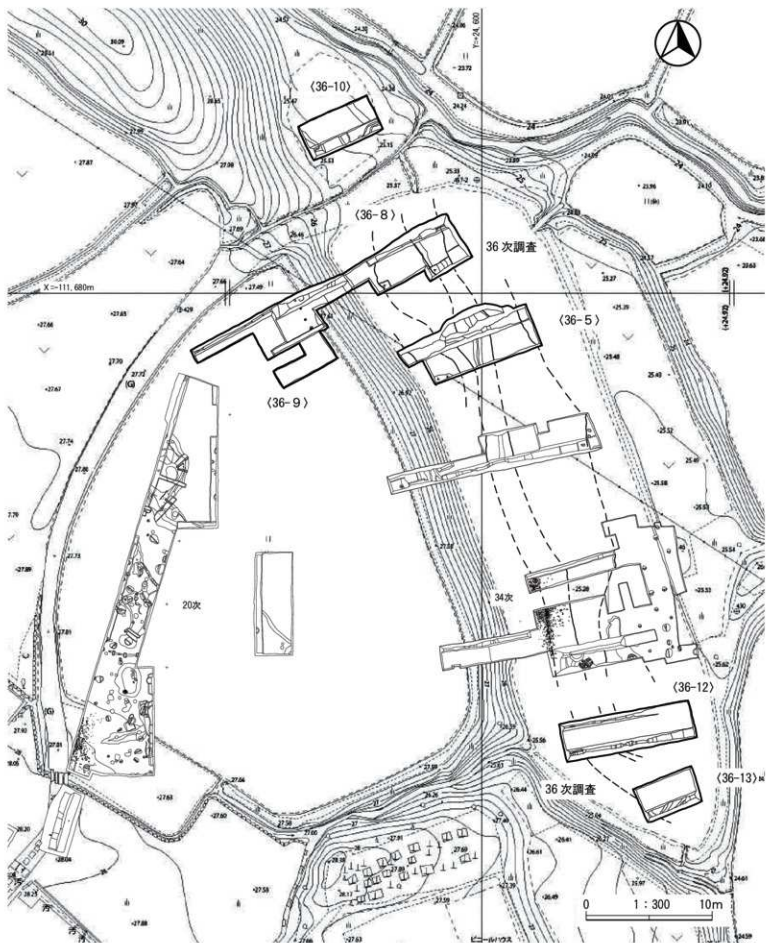
種子 36-9整地下にある土坑の可能性のある箇所から、桃類の種が4～5個出土している。この他に、36-5中位を中心に崩壊土層からも桃類を主体に一部クルミがまじって出土している。

註

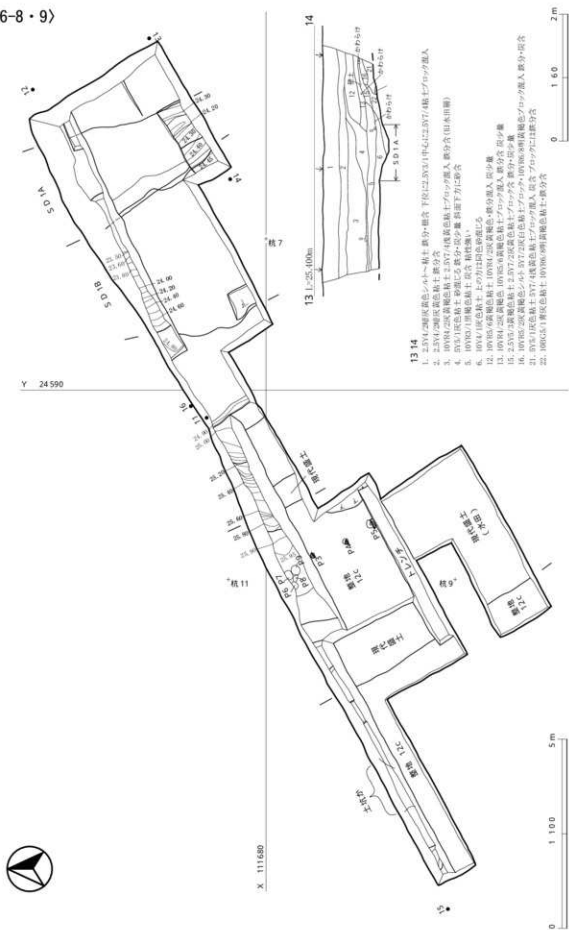
1. 平泉町教育委員会1988『平泉遺跡群発掘調査報告書』岩手県西磐井郡平泉町文化財調査報告書第13集
2. 岩手県教育委員会2001『柳之御所遺跡—第52次発掘調査概報—』岩手県文化財調査報告書第111集



全景（北から）

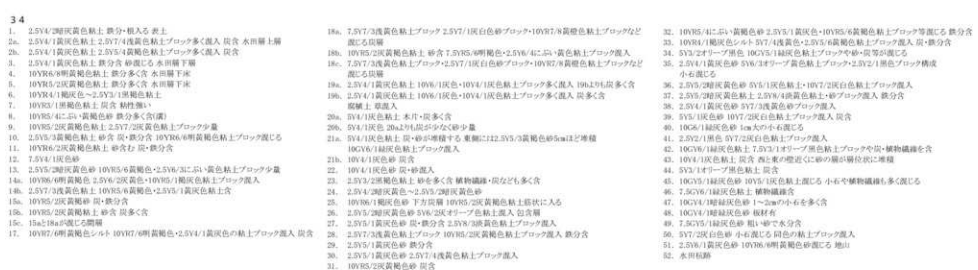
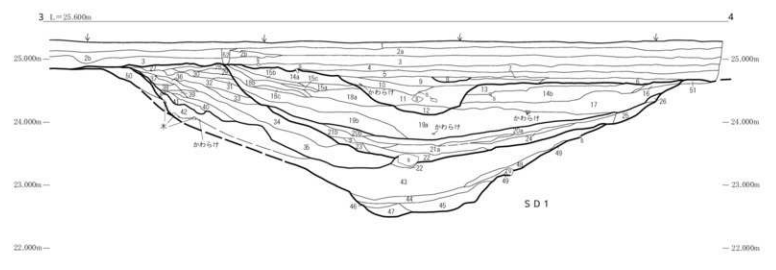
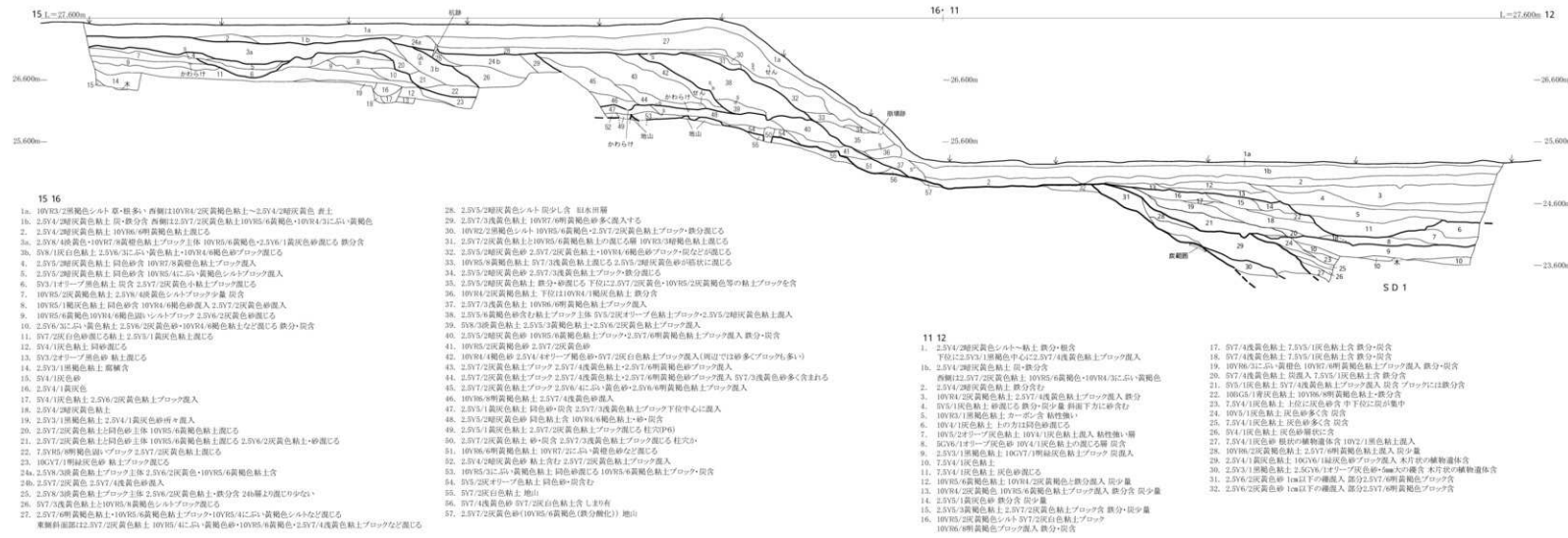


第4図 36次調査区平面図

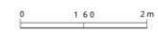


- 13 14
1. 1000/200黄褐色シルト・粘土・砂分・細分 下段は200/100中心は3077(緑土/珪石)層人 級分含(珪石)層人
 2. 200/100黄褐色粘土 級分含
 3. 100/50/200黄褐色粘土 2.0/7.4(黄褐色粘土/珪石)層人 級分含(珪石)層人
 4. 100/50/100黄褐色粘土 砂質粘土 級分・砂分・少量 級分含(珪石)層人
 5. 100/50/100黄褐色粘土 砂質粘土 級分・砂分・少量 級分含(珪石)層人
 6. 100/40/100黄褐色粘土 上の方は褐色砂質粘土
 7. 100/50/60黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 8. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 9. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 10. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 11. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 12. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 13. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 14. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 15. 2.0/7.4(黄褐色粘土/珪石)層人 級分含(珪石)層人
 16. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 17. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 18. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 19. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 20. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 21. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含
 22. 100/50/200黄褐色粘土 100/50/200黄褐色粘土・級分含人 級分含

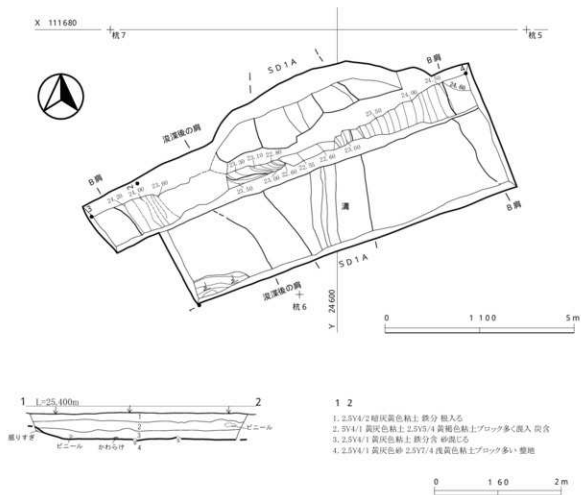
第5図 36-8・9平面図



第6図 36-5・8・9断面



(36-5)



第7図 36-5 平面図

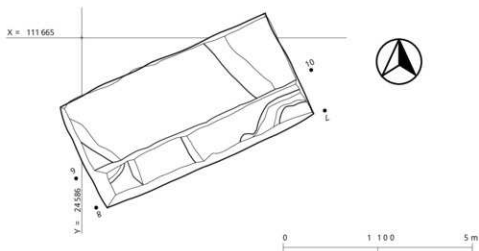


36-10 (奥)・8 (手前) (南から)

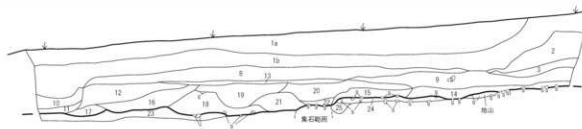


北側土塁と調査区 (東から)

(36-10)



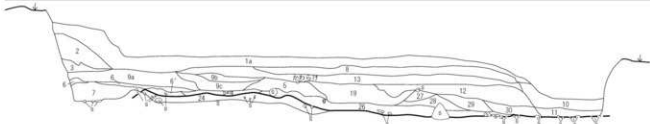
7 L=25,600m 8



7 R 9 10

- 1a. 10V R3/2黒褐色シルト 基盤部の破産物が多い
- 1b. 10V R6/2灰黄褐色粘土 鉄分含 水田層
- 2. 2.5V7/2灰黄色粘土 10V R5/6黄褐色粘土ブロック 2.5V5/2暗灰黄色砂など混じる盛土
- 3. 2.5V6/2灰黄色砂 鉄分含 西壁と北壁には岩状ブロック含
- 4. 2.5V4/1黄灰色砂礫層
- 5. 2.5V6/3にぶい・黄灰色砂 2.5V8/4暗黄色粘土ブロック少量 鉄分含 壁の崩しりやでし 入り有
- 6. 2.5V6/2灰黄色 10V R6/8明黄褐色粘土ブロック少量
- 6'. 5V8/4オリーブ黄砂 小石多く含
- 7. 2.5V6/2灰黄色粘土 2.5V4/1黄灰色砂・10V R3/2黒褐色粘土・炭含し 入り有 鉄分含 黄褐色を示す箇所有
- 8. 10V R4/1純灰色粘土 鉄分多く全体に褐色を示す
- 9a. 2.5V6/6明黄褐色粘土・5V5/2灰オリーブ色砂ブロック構成 鉄分含
- 9b. 5V6/2灰オリーブ色粘土 鉄分含
- 9c. 5V6/2灰オリーブ色砂 鉄分含
- 10. 2.5V4/2暗灰黄色粘土・マンガン少量
- 11. 2.5V5/2暗灰黄色粘土 鉄分含
- 12. 10V R5/2灰黄褐色粘土・マンガン含
- 13. 10V R4/1純灰色シルト 10V R2/6明黄褐色粘土ブロック混入 鉄分含
- 14. 2.5V3/2黒褐色砂 粘土・炭含
- 15. 2.5V5/2暗灰黄色砂 鉄分・マンガン・小石含
- 16. 2.5V5/2暗灰黄色砂・マンガン含 2.5V8/3灰黄色粘土ブロック少量 鉄分少量
- 17. 2.5V6/2灰黄色粘土 粘性強い 鉄分少量
- 18. 2.5V5/2暗灰黄色粘土 2.5V8/3暗黄色粘土ブロック 鉄分含 崩れやすい
- 19. 2.5V6/2灰黄色粘土 砂含 10V R5/6黄褐色粘土ブロック・マンガン含
- 20. 2.5V6/3にぶい・黄色粘土 同色砂含 9a層の上置ける マンガン含
- 21. 10V R6/2灰黄褐色砂・マンガン多く含
- 22. 2.5V6/2灰黄色粘土 2.5V R6/8褐色粘土ブロック混入
- 23. 2.5V7/4浅黄色土 10V R6/6明黄褐色粘土 今わらぶら 層 10V R6/2灰黄褐色砂混じる
- 24. 2.5V7/3浅黄色砂 礫層 鉄分含
- 25. 10V R6/6明黄褐色 礫層 鉄分含
- 26. 2.5V5/1黄灰色砂 小石多く含
- 27. 10V R5/2灰黄褐色砂 鉄分含
- 28. 10V R5/2灰黄褐色砂 マンガン含
- 29. 10V R5/2灰黄褐色砂 同少量
- 30. 10V R5/2灰黄褐色粘土

9 L=25,600m 10

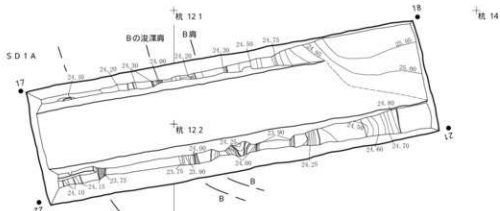


第8図 36-10

X 111710

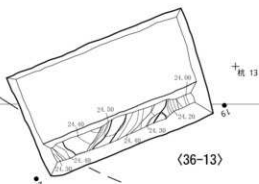


(36-12)



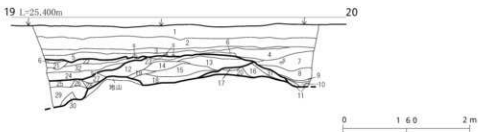
X 111720

Y 24 610



(36-13)

36 13

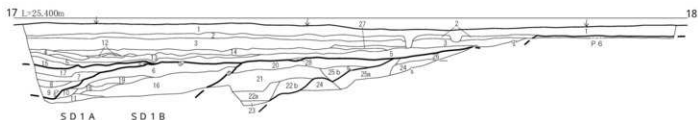


19 20

1. 2.5V5/2暗灰黄色粘土 鉄分含 水田層
2. 2.5V5/2暗灰黄色砂 鉄分多く含む褐色に見える
3. 2.5V3/2黒褐色粘土 砂鉄分含
4. 10V9B/3に多い黄褐色砂 5V7/1灰白色粘土・鉄分・腐が層位位に堆積する
西側は露出
5. 2.5V2/1黒色粘土 鉄分含
6. 10V9C/1黒褐色粘土 10V9B・8明黄褐色粒状に少量
7. 10V3/1オリーブ黒色粘土、上の方は2.5V2/1黒色粘土、10V9S/4に多い黄褐色砂混じる
8. 10V4/1灰色粘土 同色砂混じる 炭少量
9. 5V4/1灰色粘土 炭集中する層
10. 10V4/1灰色粘土 腐物繊維状の物混じる
11. 8CV7/1明オリーブ灰色砂 小6混じる 水分含
12. 5V6/1灰色砂 鉄分含 10V9S・8明黄褐色粒状ブロック含
13. 5V6/1灰色砂 2.5V7/3浅灰色粘土・ブロック混入、やむ5-6・層
14. 5V6/1灰色砂 2.5V7/3浅灰色粘土・ブロックが13層より多く混入
15. 2.5V7/6明黄褐色粘土 10V9S/2灰黄褐色粘土 14層砂上位に含
16. 2.5V6/2浅灰色粘土 同色砂・鉄分含
17. 2.5V5/1黄灰色粘土 同色砂含 やむ5-6・層
18. 2.5V5/2暗灰黄色粘土 砂混じる 2.5V7/6明黄褐色粘土・ブロック混入
19. 2.5V6/2灰黄色砂 10V9S・6明黄褐色粒状ブロック含
20. 5V6/1灰色砂 小6混じる
21. 10CV4/1暗灰灰色砂
22. 5V6/1灰色砂 2.5V4/2暗灰黄色粘土・ブロック混入
23. 2.5V5/2暗灰黄色砂 2.5V4/2暗灰黄色粘土・ブロック混入
24. 2.5V5/2暗灰黄色砂 粘性有 鉄分・炭少量含
25. 2.5V7/4浅灰色粘土 10V9B・8明黄褐色粘土・ブロック混入
26. 29層と似る 5V5/1灰色砂 5V5/2Rオリーブ色粘土少量
27. 2.5V7/2灰黄色砂 粘土に混じる 10V9S・6明黄褐色粘土・ブロック混入
28. 2.5V6/2灰黄色砂 粘土に混じる 10V9S・6明黄褐色粘土・ブロック混入
29. 5V5/1灰色粘土 同色砂や5V5/2Rオリーブ色砂多く混じる 炭含
30. 5CV7/1明オリーブ灰色砂 やむ5-6・層
31. 8CV5/1オリーブ灰色砂 粘性有
32. 2.5V5/2暗灰黄色砂 10V9B・8明黄褐色粘土・ブロック混入

第9図 36-12・13平面図

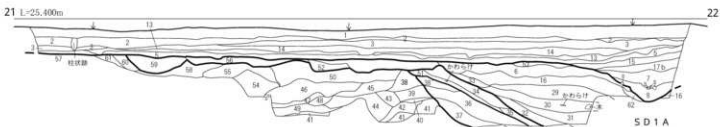
〈36-12〉



17 18

1. 2.5V3/2暗灰黄色粘土 鉄分含 本相層
2. 2.5V3/2暗灰黄色砂 鉄分多含む白色に見える
3. 2.5V3/2暗褐色粘土 砂鉄分含
4. 2.5V3/2暗褐色砂 7.5YR4/6褐色粘土混入
5. 2.5V2/1黒色粘土
6. 2.5V3/3黄褐色砂
7. 2.5V3/2暗灰黄色粘土 黒褐色土ブロック少量
8. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂 粘性强
9. 5Y3/2オリーブ黒色粘土 植物根の存在
10. 7.5Y4/1灰色砂 植物根の存在
11. 2.5V3/2暗オリーブ色粘土 砂含 2.5Y2/1黒色粘土ブロック混入
12. 10YR4/3にふい黄褐色粘土 上には10YR8/3にふい黄褐色砂多く含む下には2.5V6/2に灰多く含む
13. 2.5V6/2灰黄色粘土 2.5YR/1灰白色粘土・10YR2/1黒色粘土が少量 根状の埋蔵を極す
14. 10YR4/2灰黄色粘土 高鉄分含 10YR8/2灰黄色色・10YR6/8明黄褐色粘土ブロックなど混じる

15. 5Y3/1オリーブ黒色～5Y4/1灰色粘土 砂含みし多い 鉄分含
16. 5G5/5/1オリーブ灰色粘土 羣の草少量
17. 2.5V3/1暗褐色粘土 灰含 粘性强
18. 5G5/5/1オリーブ灰色砂
19. 7.5G5/5/1緑灰色 18層より粗い砂 木片少量・灰混じる
20. 2.5GY6/1オリーブ灰色
21. 5W/1灰色砂 同色粘土混じる 小礫含
22. 7.5V7/1灰白色粘土 礫含
23. 7.5V6/2灰オリーブ色粘土 同色砂含
24. 2.5V6/2灰黄色砂 礫含でしまった層
25. 2.5V4/3オリーブ褐色・2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロックの混合し多い
26. 2.5V4/3オリーブ褐色 礫含
27. 10YR4/6褐色粘土 同色砂含 10YR4/1暗灰色粘土ブロック混入
28. 10YR4/3にふい黄褐色シルトし多い 鉄分・灰含
29. 2.5V3/1暗褐色粘土 上下の間層



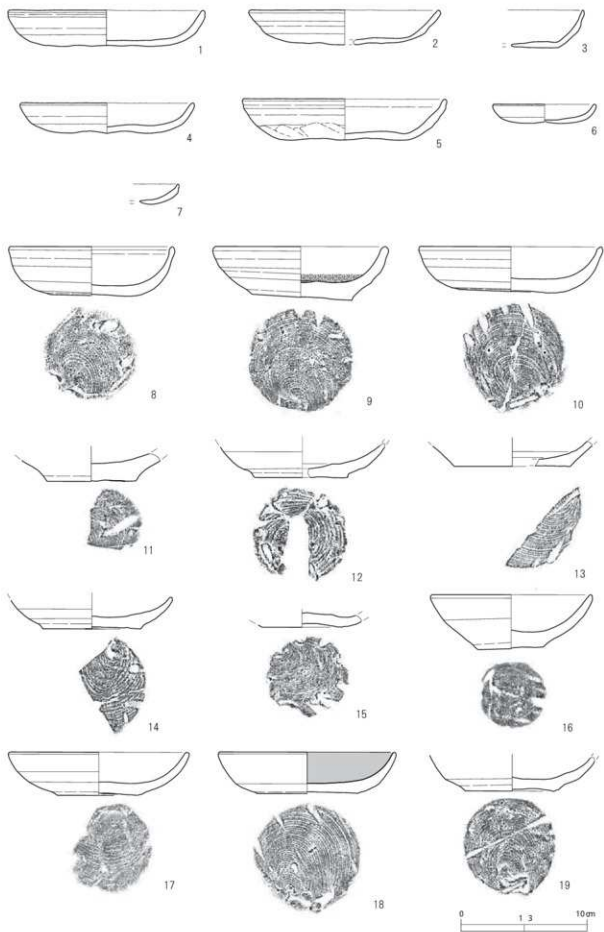
21 22

1. 2.5V3/2暗灰黄色粘土 鉄分含む 本相層
2. 2.5V3/2暗灰黄色砂 鉄分多含む白色に見える
3. 2.5V3/2暗褐色粘土 砂鉄分含
4. 2.5V3/2暗褐色砂 7.5YR4/6褐色粘土が混入
5. 2.5V2/1黒色粘土
6. 2.5V3/3黄褐色砂
7. 2.5V3/2暗灰黄色粘土 黒褐色土ブロック少量
8. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂 粘性强
9. 2.5V6/2灰黄色粘土 2.5YR/1灰白色粘土・10YR2/1黒色粘土少量 根状の埋蔵を極す
10. 10YR4/2灰黄色粘土 同色砂含
11. 10YR6/2灰黄色色・10YR6/8明黄褐色粘土ブロックなど混じる
12. 5Y3/1オリーブ黒色～5Y4/1灰色粘土 砂含みし多い 鉄分含
13. 5G5/5/1オリーブ灰色粘土 羣の草少量
14. 2.5V3/1暗褐色粘土 灰含 粘性强
15. 2.5GY6/1オリーブ灰色粘土 砂含 5Y4/1灰色粘土混入
16. 7.5V3/2オリーブ黒色 水分含みかわらぬ 木片・灰含 上には2.5V4/2暗灰色粘土・2.5V3/1暗褐色粘土に入る
17. 5Y3/1暗褐色粘土 水分含みかわらぬ 根状に灰の層 5Y4/1灰色粘土混入 植物根埋蔵
18. 2.5V6/2灰黄色粘土 同色砂・鉄分含
19. 5G5/5/1オリーブ灰色粘土 5Y3/2オリーブ黒色粘土
20. 7.5Y4/1灰色 20層と同 5Y3/2オリーブ黒色粘土
21. 5G6/1緑灰色粘土・7.5V5/2暗オリーブ色砂混じる層 小礫混入
22. 7.5V5/1灰色砂 9G5/1暗灰色粘土・小礫混じる
23. 10YR6/8明黄褐色粘土 2.5V7/3黄褐色粘土ブロック・2.5V6/2灰黄色砂など混じる
24. 38層より砂多量
25. 10YR7/6明黄褐色粘土 10YR7/2にふい黄褐色砂混じる
26. 2.5V3/3黄褐色砂 10Y3/1灰色粘土混じる

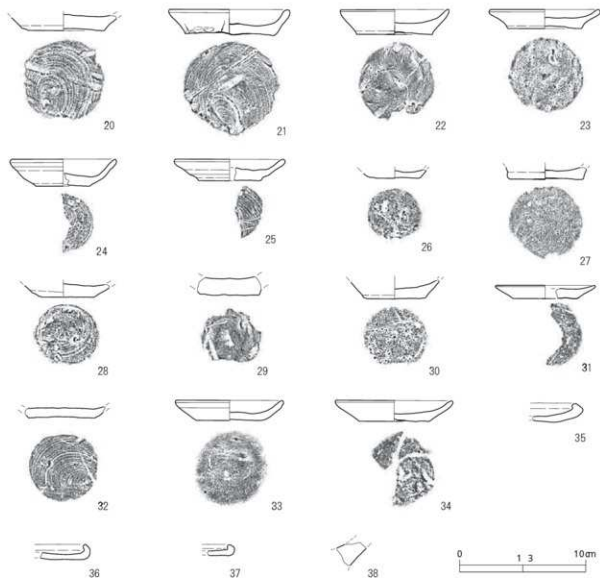
41. 5G6/1緑灰色粘土
42. 2.5V6/3にふい黄色砂 小石多く含 10GY6/1緑灰色粘土ブロック含
43. 2.5V6/2灰色砂 鉄分含
44. 2.5V6/2灰黄色砂 鉄分含
45. 10YR4/4明黄砂
46. 10YR3/6黄褐色粘土ブロック 10YR5/2灰黄褐色粘土・砂混じる
47. 5Y3/1灰色砂 5Y7/3黄褐色粘土ブロック混入
48. 7.5V6/1灰色砂 5Y7/3黄褐色粘土ブロック混入
49. 5G5/5/1オリーブ灰色砂 粘性强 鉄分含
50. 10YR5/6黄褐色粘土ブロック 10YR5/2灰黄褐色粘土・同層が大きいブロック状に混入している
51. 5Y3/2オリーブ黒色砂 粘性强 鉄分含
52. 10YR4/2灰黄色粘土 10YR6/2灰黄色色砂混じる(50層の続きか)
53. 5V6/1灰色粘土 5Y4/1灰色粘土ブロック・5Y7/2暗褐色粘土に混入 鉄分含み明黄褐色
54. 2.5V6/2灰黄色粘土 2.5V5/6黄褐色色砂・2.5V7/3黄褐色粘土ブロック混入 小石混じる 50層との間に10YR6/2灰黄褐色色砂状に入る
55. 2.5V6/2灰黄色粘土 2.5V5/6黄褐色色砂・2.5V7/3黄褐色粘土ブロック混入 右が混じらぬやわらかい層
56. 5Y7/2灰白色粘土 2.5V6/1黄灰色混じる 礫化し明黄褐色を呈する
57. 2.5V3/2暗褐色粘土 2.5V7/6明黄褐色粘土・10YR6/8明黄褐色粘土土ブロック混入
58. 2.5V6/2灰黄色砂 砂は粗く小石も混じる 上には2.5V3/1灰黄色粘土が混じる
59. 2.5V7/2灰黄色粘土 10YR5/6黄褐色粘土・同色砂が混じる
60. 5W/1灰色の粗い砂が下層を中心になんべうになる
61. 5Y3/2暗オリーブ色砂 小礫多量含
62. 10YR6/8明黄褐色粘土 同色砂も混じる 10YR4/2灰黄褐色粘土土に混入している 2.5V6/2灰黄色砂混じる
63. 2.5GY6/1オリーブ灰色粘土 2.5GY4/1暗オリーブ灰色の砂・植物根埋蔵が混入



第10図 36-12断面図



第11図 出土遺物(1)

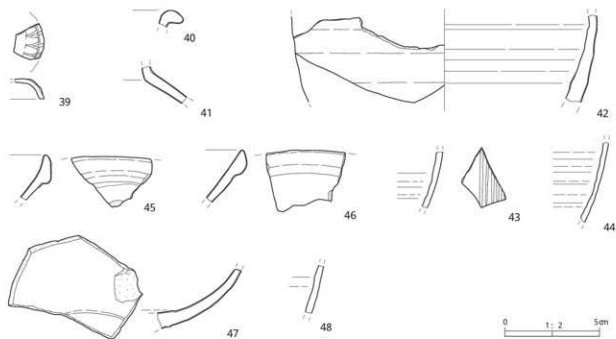


第12図 出土遺物(2)

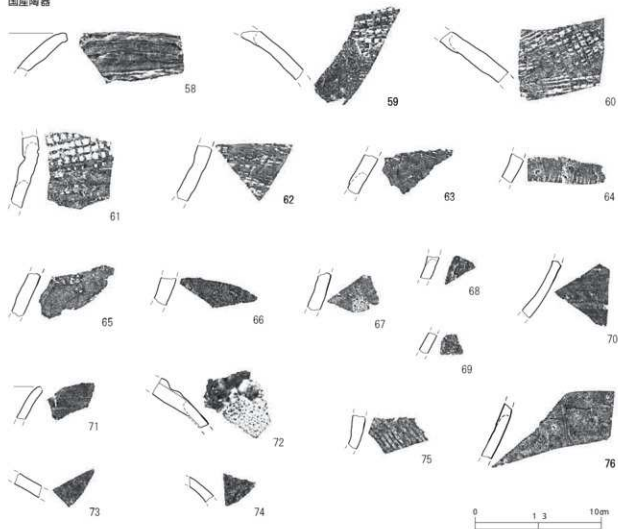
第2表 かわけ観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	法 量(cm)			残存率 (%)	備 考	登録No
					口径	底径	器高			
1	11	14	36-5 SD1B 中層	手づね 大	15.6		2.9	30	反転実測	90
2	11	14	36-5 SD1B 整地	手づね 大	15.2		-	30	反転実測 かなり摩滅している	126-3
3	11	14	36-5 SD1B 上層	手づね 大	-		-	20	穿孔か かなり摩滅している	76-3
4	11	14	36-8 SD1B上層	手づね 大	13.8		2.0~2.5	60	反転実測 摩滅している	136
5	11	14	36-12 南トレンチ SD1B上層	手づね 大	16.2		3.0~3.6	60	反転実測 圧痕あり	499
6	11	14	36-5 SD1B 中層	手づね 小	8.2		-	30	反転実測 摩滅している	217
7	11	14	36-5 SD1 壁前境層	手づね 小	-		-	20	穿孔か 摩滅している	261-4
8	11	14	36-5 SD1B中層	ロクロ 大	13.2~14.0	6.8~7.0	3.5~4.0	完形	口縁に一部歪み スノコ痕あり	171
9	11	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 大	14.0	8.1	3.6~4.5	60	内面にワラ付着 スノコ痕あり	172
10	11	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 大	14.5	7.6~8.0	3.7	80	スノコ痕あり	160
11	11	14	36-5 SD1B 上層	ロクロ 大	-	7.0	-	40	反転実測 摩滅している	135
12	11	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 大	-	7.5	-	50	接合 反転実測	104
13	11	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 大	-	9.2	-	40	反転実測 スノコ痕あり	295-2
14	11	14	36-5 SD1B 整地	ロクロ 大	-	7.8	-	30	反転実測 内面被熱	258
15	11	14	36-5 SD1B 整地	ロクロ 大	-	6.4	-	40	底部のみ 内外面被熱	254
16	11	14	36-12 南トレンチ 整地層	ロクロ 大	12.7~13.0	5.4	3.9~4.7	90	摩滅している	517-1
17	11	14	36-12 SD1B 上層	ロクロ 大	14.4	6.3~6.9	3.4~3.7	60	スノコ痕あり	469
18	11	14	36-12 南トレンチ SD1B上層	ロクロ 大	14.1	8.3	3.3	60	反転実測 内面煤付着 口縁摩滅	504
19	11	14	36-12 南トレンチ SD1B上層	ロクロ 大	-	7.3~7.7	-	60	スノコ痕あり	493
20	12	14	36-12 南トレンチ SD1B上層	ロクロ 大	-	6.3~6.4	-	40	底部のみ スノコ痕あり	526
21	12	14	36-5 SD1B 下層	ロクロ 小	9.6	7.0~7.5	1.9~2.4	完形	歪みあり 調整痕 スノコ痕あり	214
22	12	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 小	8.6	6.0	1.9~2.2	70	反転実測	183

中国産陶磁器

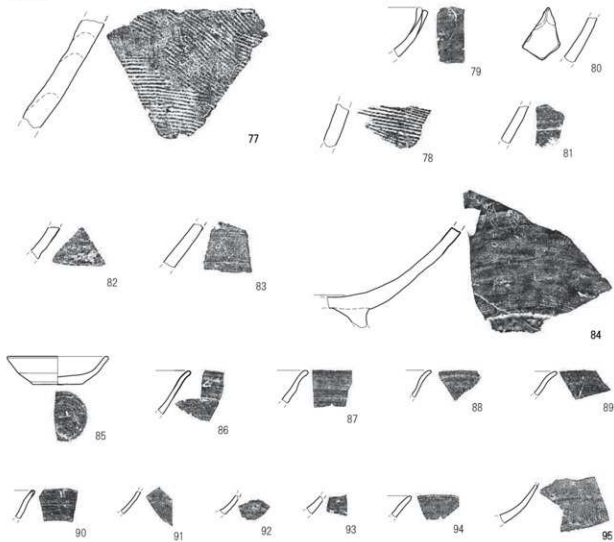


国産陶器

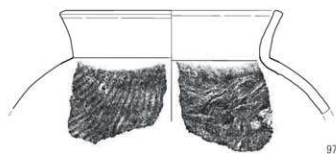


第13図 出土遺物(3)

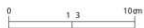
国産陶器



須恵器

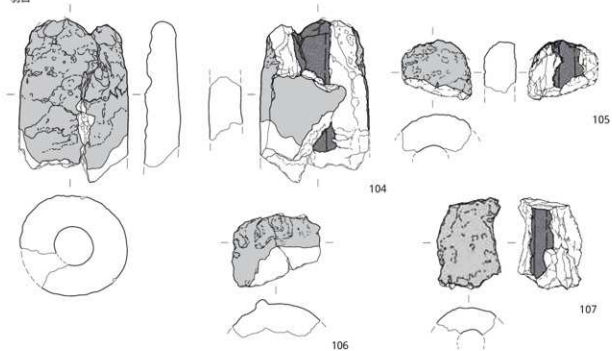


土師器

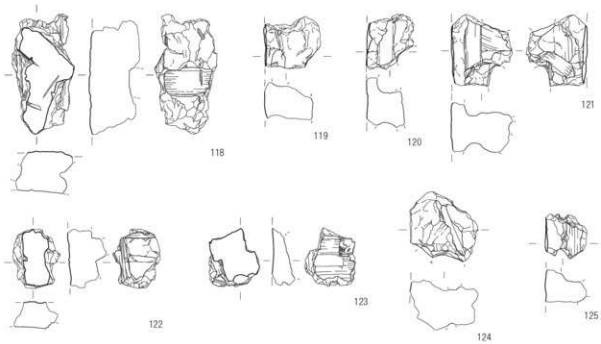


第14図 出土遺物(4)

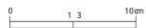
羽口



土壁

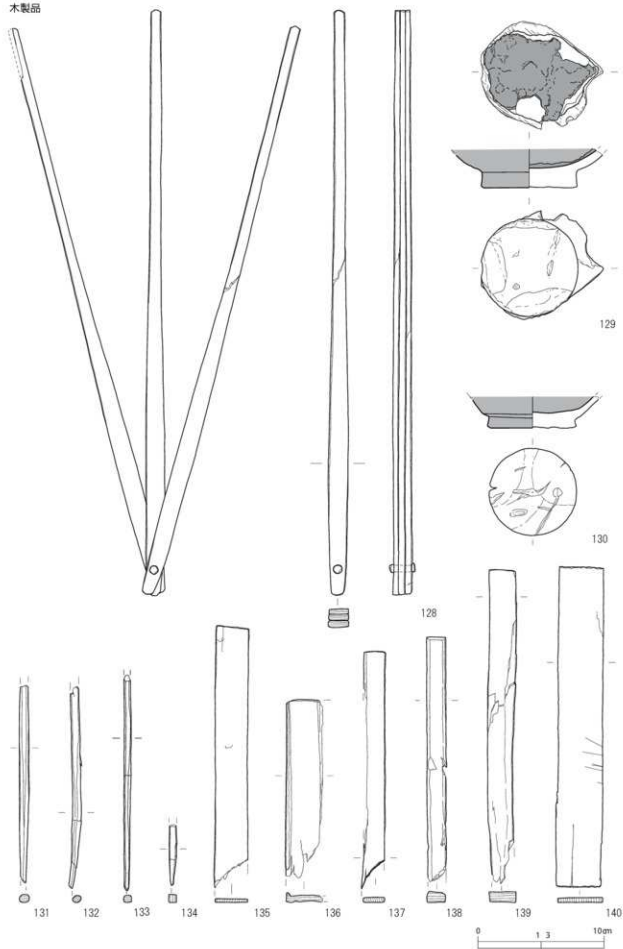


鉄製品



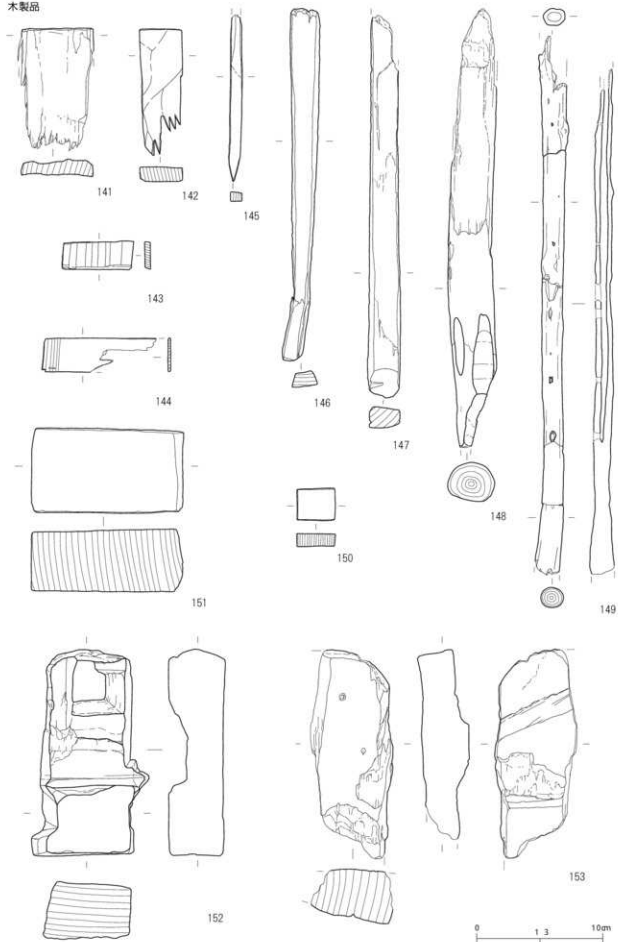
第15図 出土遺物(5)

木製品

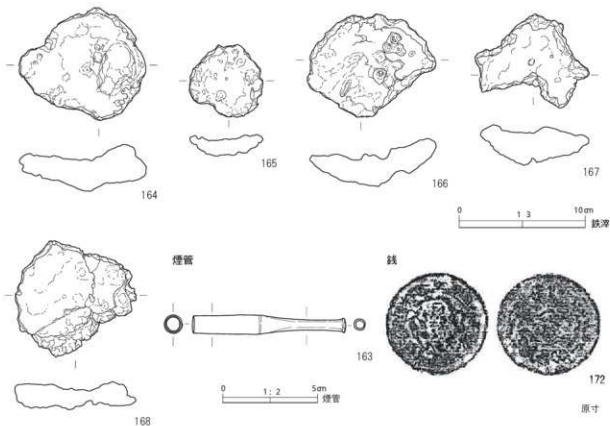


第16図 出土遺物(6)

木製品



第17図 出土遺物(7)



第18図 出土遺物(8)

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	法 量(m)			残存率 (%)	備 考	登録No
					口径	底径	器高			
23	12	14	36-5 SD1B	ロクロ 小	8.8	5.9	1.5~1.9	60	反転実測	180-8
24	12	14	36-5 SD1B 東側中層	ロクロ 小	8.4	4.4	2.2	40	反転実測	218
25	12	14	36-5 SD1 上の礎 砂層	ロクロ 小	8.8	5.0	1.8	40	反転実測	32
26	12	14	36-5 SD1B 上層	ロクロ 小	-	4.1	-	30	底部のみ 摩滅している	77
27	12	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 小	-	6.0	-	40	円盤状 摩滅している	133
28	12	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 小	-	4.8	-	50	底部のみ スノコ痕あり	234-5
29	12	14	36-5 SD1B 中層	ロクロ 小	-	4.7	-	40	円盤状	130
30	12	14	36-5 水田下床	ロクロ 小	-	4.9	-	50	反転実測 摩滅している	20
31	12	14	36-8 SD1B 戦地	ロクロ 小	7.9	5.0	1.1	30	反転実測 摩滅している	203
32	12	14	36-9 発掘体験 現代盛土	ロクロ 小	-	5.5	-	50	円盤状 摩滅している	242-1
33	12	14	36-12 南トレンチ SD1B 上層	ロクロ 小	8.6	5.4	1.7	90	合わせ口かわらけの上	505
34	12	14	36-12 南トレンチ SD1B 上層	ロクロ 小	9.3	5.4	1.7	60	合わせ口かわらけの下 反転実測	506
35	12	14	36-5 SD1 上層砂層	内折れ	-	-	-	10	摩滅している	45-2
36	12	14	36-5 SD1B 中層	内折れ	-	-	-	20		294-2
37	12	14	36-5 東側 水田下灰色粘土層	内折れ	-	-	-	10	摩滅している	31-2
38	12	-	36-9 北トレンチ内 整地層下層 特殊かわらけ	-	-	-	-		小片 鉢状	479-2

第3表 中国産陶磁器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No
39	13	15	36-8 SD1A 上層	青白磁	合子	蓋	12C		69-2
40	13	15	36-5 東側水田下灰色粘土層	白磁	壺	口縁	12C	Ⅱ 承	27
41	13	15	36-8 表土水田層	白磁	壺	頸~肩	12C	Ⅲ	55-14
42	13	15	36-10 南トレンチ 水田層	白磁	壺	胴	12C	Ⅲ	156-6
43	13	15	36-5 水田下床	白磁	壺	胴	12C	Ⅱ	19-12
44	13	15	36-5 SD1B 戦地	白磁	壺	胴	12C	Ⅱ	103
45	13	15	36-10 南トレンチ 水田層	白磁	碗	口縁	12C	IV	156-7
46	13	15	36-5 SD1A 堀(3か境)	白磁	碗	口縁	12C	IV	272
47	13	15	36-5 SD1B 上層	白磁	碗	体	12C	V	40
48	13	15	36-8 SD1A 上層	褐釉陶器	壺	胴	12C		69-8
49	-	15	36-5 東側水田下灰色粘土層	白磁	壺	胴	12C	Ⅲ 小片	24

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No
50	15	36-5	SD1B 整地	白磁	甕	胴	12C	Ⅱ 小片	28-2
51	15	36-5	東側水田下灰色粘土層	白磁	甕	胴	12C	Ⅱ 小片	31-3
52	15	36-5	東側水田下灰色粘土層	白磁	甕	体	12C	Ⅳ～Ⅴ 小片	31-8
53	15	36-5	東側水田下灰色粘土層	白磁	甕	体	12C	Ⅴ 小片	31-9
54	15	36-5	SD1上溝 砂層	白磁	甕	胴	12C	Ⅱ 小片	36
55	15	36-5	SD1B 整地	白磁	甕	体	12C	Ⅳ～Ⅴ 小片	97-2
56	15	36-8	東側現代盛土	白磁	甕	体	12C	Ⅱ 小片	114-2
57	15	36-13	水田層	白磁	甕	胴	12C	Ⅲ 小片	434-1

第4表 国産陶器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No
58	13	15	36-5 SD1B 中層	瀧美	甕	口縁	12C		274
59	13	15	36-8 崩壊壁 盛土	瀧美	甕	肩	12C	外面に軸 押印有	300-2
60	13	15	36-9 北トレンチ 整地層	瀧美	甕	肩	12C	外面に軸 押印有	420
61	13	15	36-8 水田層上の盛土	瀧美	甕	胴	12C	押印有	122
62	13	15	36-9 整地層	瀧美	甕	胴	12C	押印有	475
63	13	15	36-10 南トレンチ 東下層 砂礫層	瀧美	甕	胴	12C	押印	196-2
64	13	15	36-5 水田下床	瀧美	甕	胴	12C		30-2
65	13	15	36-8 水田層	瀧美	甕	胴	12C		134
66	13	15	36-12 SD1A上層黒褐色粘土層	瀧美	甕	胴	12C		450-2
67	13	15	36-5 SD1上の溝	瀧美	甕	胴	12C		21
68	13	15	36-9 東水田下位層	瀧美	甕	胴	12C		383-2
69	13	15	36-9 水田層	瀧美	甕	胴	12C		116-3
70	13	15	36-9 上手部整地層	瀧美	甕	胴	12C		396-2
71	13	15	36-12 水田	常滑	甕	口縁	12C		440-2
72	13	15	36-5 SD1B 西側整地	常滑	甕	肩	12C	外面軸付着	140-8
73	13	15	36-12 南トレンチ 水田～SD1上面	常滑	甕	肩	12C	外面軸付着	485-2
74	13	15	36-8 崩壊壁水田層下	常滑	甕	肩	12C	外面に軸有	301-7
75	13	15	36-8 東 水田層	常滑	甕	胴	12C		130-2
76	13	16	36-8 崩壊壁水田層下	常滑	甕	胴	12C		301-2
77	14	16	36-10 表土層	須恵器系	甕	胴	12C	外面に全体的に押印	148-2
78	14	16	36-12 水田層	須恵器系	甕	胴	12C	外面全体的に押印有	439
79	14	16	36-5 崩壊壁水田層下床	瀧美	片口鉢	口縁	12C		270-3
80	14	16	36-8 SD1B上層	瀧美	片口鉢	口縁	12C		353-2
81	14	16	36-5 水田下床	瀧美	鉢	体	12C		30-6
82	14	16	36-5 整地層直上	常滑	鉢	体	12C	内面金付着	17
83	14	16	36-5 SD1上溝 砂層	常滑	鉢	体	12C	内面軸付着	46-2
84	14	16	36-5 SD1B 整地	瀧美	鉢	体～底	12C		257
85	14	16	36-8 SD1B 整地	瀧美	小皿	口縁～底	12C	口径8.0、底径4.0、器高2.2(cm)	419
86	14	16	36-5 SD1B 中層	瀧美	碗	口縁	12C		284-3
87	14	16	36-5 水田下床	瀧美	碗	口縁	12C		19-3
88	14	16	36-8 SD1A下層	瀧美	碗	口縁	12C		363-2
89	14	16	36-5 SD1A 上層	瀧美	碗	口縁	12C		39
90	14	16	36-5 東側水田下灰色粘土層	瀧美	碗	口縁	12C	輪花	31-10
91	14	16	36-12 SD1層土水田層下	瀧美	碗	体	12C		437-2
92	14	16	36-8 SD1A 上面	瀧美	碗	体	12C		69-3
93	14	16	36-5 SD1B上層	瀧美	碗	体	12C		87-2
94	14	16	36-5 SD1B 中層	脇投	碗	口縁	12C		284-10
95	14	16	36-8 SD1B 上層	脇投	碗	体	12C	内面に軸	159
96	—	—	36-5 水田下床	瀧美	鉢	胴	12C	小片	19-13

第5表 須恵器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No
97	14	16	36-12 南トレンチ SD1B上層	須恵器	甕	口縁～肩	平安	口径17.6cm 外面にタキ有	495
98	14	16	36-8 SD1A下層	須恵器	甕	肩	平安	外面タキ 内面当て貝痕 外面軸有	358
99	14	16	36-5 表土	須恵器	杯	口縁部	平安		178-2
100	14	16	36-5 表土	須恵器	杯	体～底部	平安		1-13
101	14	16	36-12 SD1A上面	須恵器	甕	胴	平安	外面タキ有 削り有	442

第6表 土師器観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No
102	14	16	36-5 水田層	土師器	甕	胴～底	平安		179-7
103	14	16	36-9 水田層	土師器	甕	口縁	平安		144-4

第7表 羽口観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	法 量 (cm)			重量 (g)	備 考	登録No
				長さ	幅	厚さ			
104	15	17	36-5 SD1B 中層	11.8	8.7	2.7	539.0	接合	176
105	15	17	36-5 SD1B 上層	4.4	5.4	2.4	71.1		211-2
106	15	17	36-5 SD1B 中層	5.1	6.4	2.2	80.0	接合	284-4
107	15	17	36-8 SD1B 上層	6.7	4.2	1.7	76.6		359
108	-	17	35-5 SD1B 整地	3.6~5.2	2.9~4.2	1.9~3.0	101.3	3点	107-2
109	-	-	36-5 SD1A 下層	3.0	2.5	1.8	17.1		58-2
110	-	-	36-8 SD1A 上面	1.8	2.0	1.2	3.3		69-4
111	-	-	36-5 SD1B 整地	3.5	4.0	1.5	17.3	接合	97-4
112	-	-	36-5 SD1B 中層	3.6	2.1	1.3	9.2		110-2
113	-	-	36-5 SD1B	2.2	2.0	1.4	6.0		180-3
114	-	-	36-5 割削土中	2.1	2.0	1.2	5.4		184-2
115	-	-	36-5 SD1B 整地	1.5~3.9	2.5~3.2	1.0~1.4	20.6	2点	209-3
116	-	-	36-5 SD1A覆土	5.0	2.5	1.4	23.0		275-2
117	-	-	36-12 SD1B覆土	3.2	2.5	1.2	8.5		437-3

第8表 土壁観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	法 量 (cm)			重量 (g)	備 考	登録No
				長さ	幅	厚さ			
118	15	17	36-9 水田層 整地層	9.1	4.7	4.0	99.6	白土付着か スサ有 竹痕	207-2
119	15	17	36-9 東端 現代埋土	9.0	4.5	2.5	42.5	白土付着 スサ有 竹痕	346
120	15	17	36-9 東端 水田下位層か	4.0	3.7	3.7	40.4	白土付着 スサ有 竹痕	378-3
121	15	17	36-8-9間 取水田層	5.6	4.8	3.9	72.6	白土付着 スサ有 竹痕	366-2
122	15	17	36-8-9間 取水田下位層か	4.7	3.7	2.9	26.1	白土付着 スサ有 竹痕	365-2
123	15	17	36-8-9間 取水田下位層か	3.9	4.5	1.6	18.0	白土付着 スサ、板 痕	365-3
124	15	17	36-9 現代盛土	5.2	5.4	3.4	66.5	スサ、板 竹痕	321
125	15	17	36-5 西側 整地層	3.5	3.3	2.5	20.0	白土付着 スサ、竹、穴有	41-2
126	-	-	36-9 東端現代盛土下	1.5~4.5	0.9~3.6	0.75~2.6	64.3	スサ、竹、板痕 7ヶ	354-2
127	-	-	36-8 東水田層	1.1~5.7	0.9~3.1	0.63~3.3	75.9	スサ、竹痕	130-3

第9表 木製品観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類状態	法 量 (cm)			備 考	登録No
					長さ	幅	厚さ		
128	16	18	36-8 SD1B 25層砂層	扇の骨	46.4	1.5	0.6	先端部幅0.7~0.8cm	344
129	16	18	36-5 SD1B 中層	漆器		底径7.6		付着物有	168
130	16	18	36-5 SD1B 下層	漆器		底径6.9			204
131	16	18	36-5 埋削埋土	箸	15.6	0.8	0.6		233-8
132	16	18	36-5 SD1B 中層	箸	16.3	0.7	0.6		288-2
133	16	18	36-5 SD1B 整地	箸	17.0	0.6	0.6	2片接合	297
134	16	18	36-5 SD1B 下層	先端加工品	4.8	0.6	0.6	2片が割れている	291-3
135	16	18	36-5 SD1B 中層	板状	20.7	2.6	0.3	墨書か	167
136	16	18	36-5 SD1B 整地	板状	14.1	2.9	0.8		265
137	16	18	36-5 SD1B 中層	板状	18.8	1.7	0.4		174
138	16	18	36-5 SD1B 中層	板状	19.4	1.5	0.8		287
139	16	18	36-5 SD1B 下層 粘土層	板状	24.8	2.1	0.9		285-1
140	16	18	36-5 SD1B 下層	板状	25.4	3.7	0.3	傷有	202
141	17	18	36-8 SD1B 中層	板状	9.7	5.7	1.2		322
142	17	18	36-5 SD1B 下層	加工板	10.0	3.3	1.2	ノコギリ歯状	227
143	17	18	36-5 SD1B 中層	曲物銅板	2.3	5.6	0.4		288-3
144	17	18	36-12 南トレンチ SD1B 上層	曲物銅板	2.7	8.9	0.2		520
145	17	18	36-8 SD1B 中層	形代か	13.1	1.0	0.7		531
146	17	18	36-5 SD1B 整地	棒状	27.9	2.3	1.3		228
147	17	18	36-5 SD1B 整地	棒状	30.3	2.6	1.9	劣化している	245
148	17	19	36-10 南トレンチ崩壊土	板状	34.8	3.6	3.2	現代の可能性	175
149	17	19	36-5 SD1B 中層	杖状	40.0	2.0	1.8	中が空洞 穿孔有	152
150	17	19	36-5 SD1B	四角い板状	2.6	3.0	1.0		180-1
151	17	19	36-5 SD1B 中層	角材	5.7	12.0	4.9		200
152	17	19	36-5 SD1B 下層	部材	16.3	8.6	4.5		283-1
153	17	19	36-5 SD1B 中層	未成品	16.6	6.5	4.0		201
154	-	-	36-5 SD1B 中層	形代か	8.4	1.9	0.5		625

第10表 金属製品観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類状態	法 量(cm)			重量(g)	備 考	登録No
					長さ	幅	厚さ			
155	15	19	36-8 SD1A 上面	T字状	4.4	4.1	0.8	13.3		69-6
156	15	19	36-5 SD1B 整地	筒状	3.7		0.7	8.7	種1.7~2.5cm	209-5
157	15	19	36-12 北トレンチ 水田層	刀子か	2.6	2.6	1.0	11.9	折り曲げ	423-3
158	15	19	36-12 東端 水田層	角釘	2.9	0.9	0.5	2.2		424-2
159	15	19	36-12 東端 水田層	釘状	2.3	0.8	0.7	3.4		424-4
160	-	19	36-5 SD1B 上層	釘	3.2	0.9	0.9	2.4		87-5
161	-	19	36-8 SD1B 上層	不明	3.1	1.7	1.5	10.1		188-3
162	-	19	36-12 SD1覆土水田下	釘	2.6~3.0	0.9~1.1	0.8~0.9	5.0	2点	437-6

第11表 煙管観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	法 量(cm)		備 考	登録No
					長さ	径		
163	18	19	36-8 下位水田層	吸口	8.1	1.0	継字残存	60

第12表 鉄滓観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	大きさ(cm)	重量(g)	磁着	備考	登録No
164	18	19	36-5 SD1B 中層	輪型	8.9×10.0	242.3	有		95
165	18	19	36-5 SD1B 整地	輪型	5.7×5.8	60.0	有		209-4
166	18	19	36-5 SD1B 中層	輪型	8.1×10.0	265.4	有		267-1
167	18	19	36-5 SD1B 中層	輪型	8.6×6.7	164.5	有		267-2
168	18	19	36-8 SD1B 中層	輪型	9.2×9.6	146.3	有		323
169	-	19	36-5 SD1B東 上層		1.2~6.0	116.1	有	8点	74-3
170	-	19	36-5 SD1B		0.6~6.4	53.3	有	5点	180-4
171	-	19	36-8 SD1 中層		1.1~6.0	133.8	有	23点	328-7

第13表 銭貨観察表

No	図版	写真 図版	出土位置・層位	種類	大きさ(cm)	重量(g)	鋳造年代	備考	登録No
172	18	19	36-8 下位水田層	飛1鉄剛貨	2.6	5.4	明治八年	摩滅している	61-10

IV まとめ

今回の調査では、無量光院跡北東側の範囲確認を行った。検出遺構は堀2条、整地層、柱穴8個である。以下遺構毎に記述しまとめに代えたい。

(1) 堀跡について

今回の調査では、無量光院跡の北東側を区画する新旧2時期の堀跡を確認した。新しいSD1Aは、古いSD1Bを埋め立てて小規模に造り直している。SD1Aの脇は地山起源の明黄褐色粘土で被覆されており、見え方を意識していた可能性がある。

<SD1Bと整地層との関係性> SD1Aを構築する際の盛土(6~8・14~22層)と高位面(断面15-16)の整地層は一連ではなく、SD1Bと上位面の整地層が一連で一体的に整備されたと考えられる。

<SD1Bは複数時期に分けられるか?>大きく4つに大別され、上位はSD1A構築時の整地層(13~19層)、中位は自然堆積層(20~22層)、下位は自然堆積層(42~47層)が堆積し、斜面上位である西側では中位と下位の境に崩壊土(27~41)が挟まれ、中位層に切られていた。問題は中位・下位の時間差であるが、下位の自然堆積層から出土したかわらけが少なく、中位は灰色粘土、下位は緑灰~暗緑灰色が薄く層状に堆積していることから、中位と下位の時間幅を求めない方が良いと判断している。

ただし、崩壊土を切って中位層が堆積していることから、単純に浅濠が行われたというよりは、周辺のメンテナンスを含めた大規模な修繕であった可能性が考えられる。

<底面>底面の勾配については新しいSD1Aが北から南なのに対し、古いSD1Bが南から北に向かうにつれて低くなっており、勾配が逆転している点も気になる。南トレンチでは堀跡の東側も大規模に整地し、その上面から掘り込んでいた。旧地形に逆らうかのような南から北への勾配が結果的にうまくいかなかったため、作り直しの段階で地形に即した勾配に変更した可能性もある。

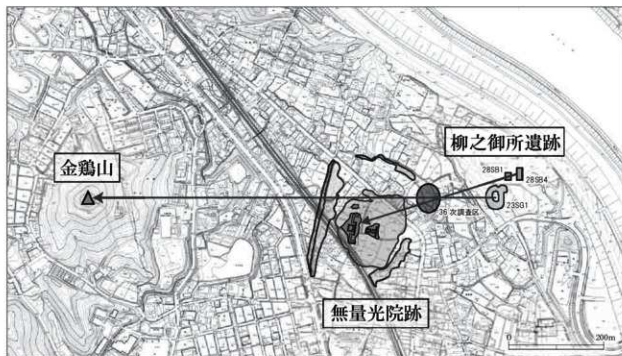
<出土遺物>かわらけはロクロ主体ではあるものの、上位・中位においても手づくねが含まれていた。下位では破片主体ではっきりしないが、ロクロかわらけが主体であるものの、一部手づくねが含まれていた。中位からは木製品や羽口・漆器・鉄滓の出土が目立つ。比較的口径のある羽口と椀形滓の出土が際だっている。調査区の北西側で行われた猫間が淵第2次調査では羽口と鉄滓が多く出土しており、ある時期に生産施設が周辺にあった可能性を伺わせるものである。

また、特筆されるのはNa128の扇の骨である。長さが46.4cmある大きく、骨が3本であることが特徴である。長さが40cmのものは柳之御所遺跡52SE8で出土したもののみである。しかも柳之御所例は扇骨は4本で本例は更に少ない。実用的というよりは意匠的なものなのだろうか。

<SD1Bの時間差はあるのか?>前回までは短期間に堀を造り替えた可能性も視野に入れて検討していたが、一定量の手づくねかわらけの出土があることから、無量光院跡造営以降に大規模な浚渫を行っていた可能性がある。今後は、柳之御所遺跡の堀の浚渫との関係性を検討していきたい。

<北側土塁があったのか>断面15-16で確認されている現代盛土の延長は約8m盛土厚は平均40cmを測る。断面図上の面積は3.2㎡である。これに対して、同断面24a層から東側で明確な旧水田に伴う30cm程の段差があり、北側土塁の北辺となる可能性が想定される。この部分と20次調査の溝の間の距離は約10mを測るが、仮に北側土塁があった場合、土塁の高さは60cm程となる。ご近所のおばさんによると、かつてこの付近に低い畦畔状の土手があり、水田を広げるときに崩したという話があった。仮に土塁があったとしてもかなり低かったと考えられる。

何故今回の調査区付近において、北側土塁が低かったのだろうか、柳之御所遺跡の中心建物(28SB1・4)から金鷄山山頂及び無量光院本堂(阿弥陀堂)を繋ぐ線上に今回の調査区が位置している(第19図)。可能性の示唆になるが、柳之御所遺跡から無量光院跡阿弥陀堂が見えやすいように(見えたとしても屋根の部分だけの可能性が高いが)低くしたため、後世の削平を受けやすい環境となり、結果的に残らなかった可能性も考えられる。また、柳之御所遺跡の池(23SG1)から真西に金鷄山山頂や無量光院跡の張り出しが位置している事は知られているが、この線上にも今回の調査区は位置しており、今後慎重に検討する必要があるかと思われる。



第19図 36次調査区と柳之御所遺跡との位置関係



猫間が淵をはさみ両遺跡を北から望む

写真図版



全景（東から）



全景（北から）



36-8（手前）

36-5（奥）全景（北から）

写真図版 1 全景

断面3-4（南西から）



断面3-4①（南から）



断面3-4②（南から）



写真図版 2 36-5（1）



断面3-4（南西から）



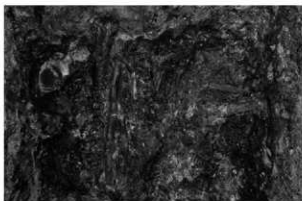
断面3-4西端（南から）



遺物出土状況



断面3-4西端拡大（南から）



断面3-4西端整地層下（東から）

写真図版3 36-5（2）



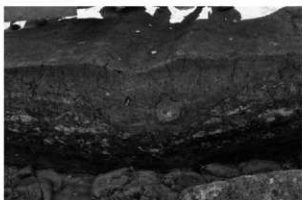
SD1A上面検出小溝（南から）



SD1A石出土状況（北西から）



SD1A断面（南西から）



SD1A断面（北西から）



トレンチ南壁（北東から）



トレンチ南壁①（北西から）



トレンチ南壁②（北西から）



トレンチ南壁③（北西から）

写真図版4 36-5(3)



36-8全景（北から）



断面11-12（南東から）

写真図版5 36-8（1）



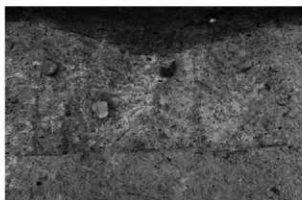
SD 1 西肩の状況 (南西から)



SD 1 上面調査状況 (南西から)



断面11-12③ (南東から)



南拡張部SD 1 A (北西から)



断面11-12① (南から)



断面11-12② (南から)



崩出土状況① (南から)



崩出土状況② (南から)

写真図版 6 36-8 (2)



36-9全景（北から）



断面15-16①（南から）



断面15-16②（南西から）



36-9と北側土塁（南東から）



36-9整地層下遺物出土状況（南東から）

写真図版7 36-9（1）



36-9東側（東から）



断面15-16③（南から）



断面15-16④（南から）



断面15-16③拡大（南から）



断面15-16東端（南から）

写真図版 8 36-9（2）



36-9全景（南東から）



断面15-16中央とP 3～5（南東から）



断面15-16中央（南東から）



断面15-16とP 6～9（南東から）



36-9～8（南西から）

写真図版9 36-9（3）



全景（南東から）



断面7-8（北から）



トレンチ西端（東から）



断面7-8①（北西から）



断面7-8②（北西から）

写真図版10 36-10



全景（北東から）



整地層下かわらけ出土状況（北から）



断面21-22（北東から）



断面17-18（南西から）



SD1A断面（南から）

写真図版11 36-12（1）



全景（北西から）



断面21-22中央（北から）



断面21-22西（北から）



SD 1 A断面（南から）



SD 1 A石出土状況（北から）

写真図版12 36-12（2）



全景（南東から）



断面19-20（北から）



断面19-20東端（北から）



断面19-20①（北西から）

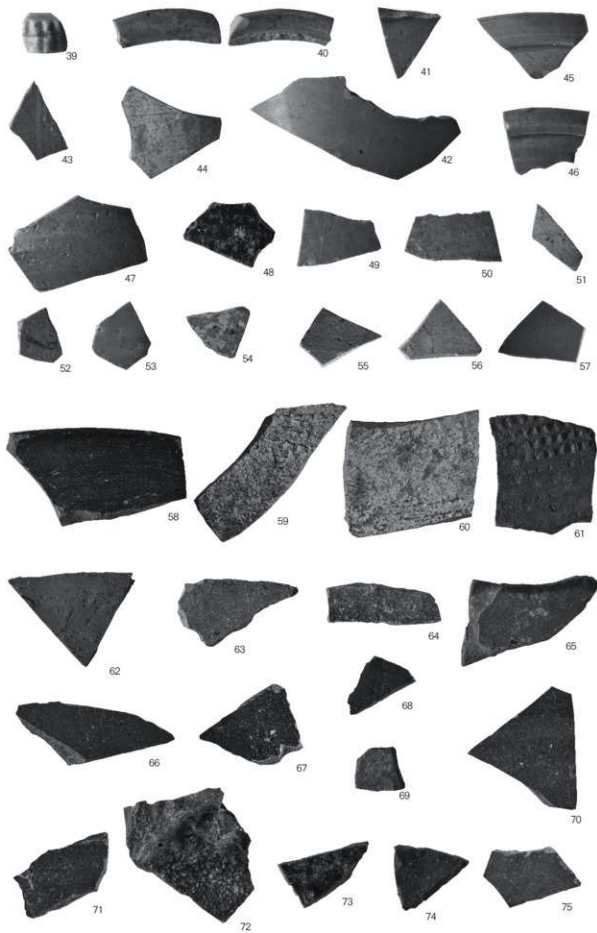


断面19-20②（北西から）

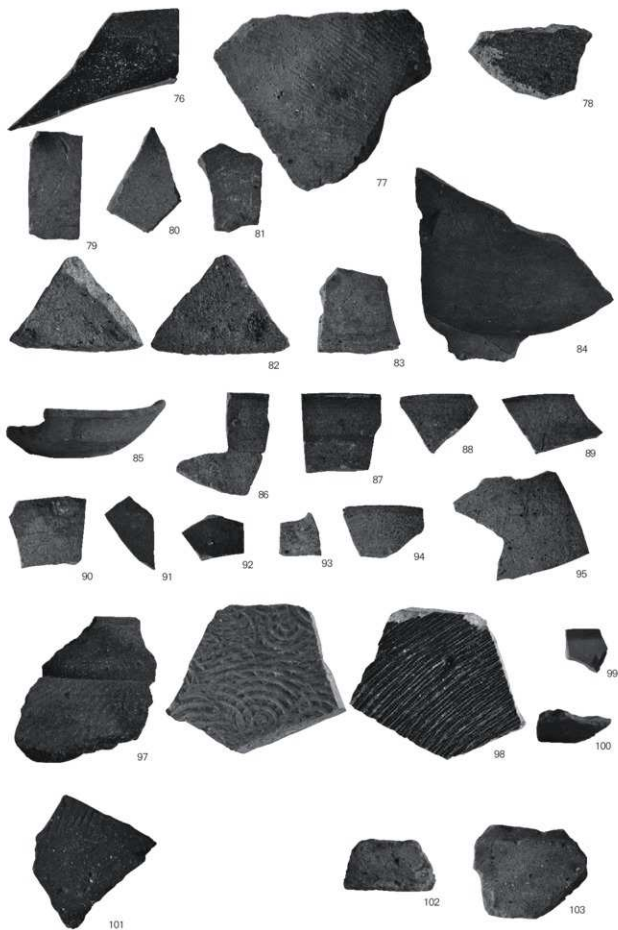
写真図版13 36-13



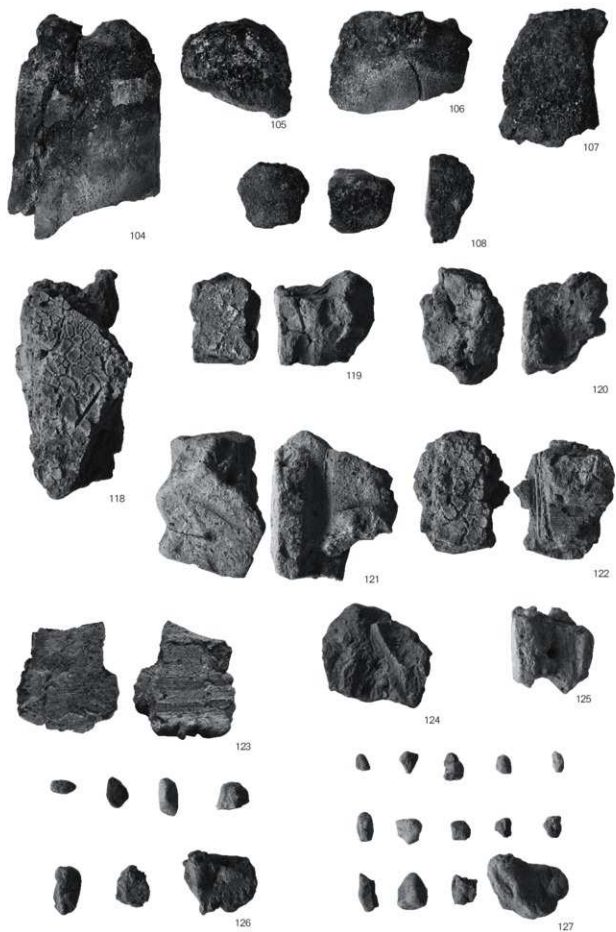
写真図版14 出土遺物（1）



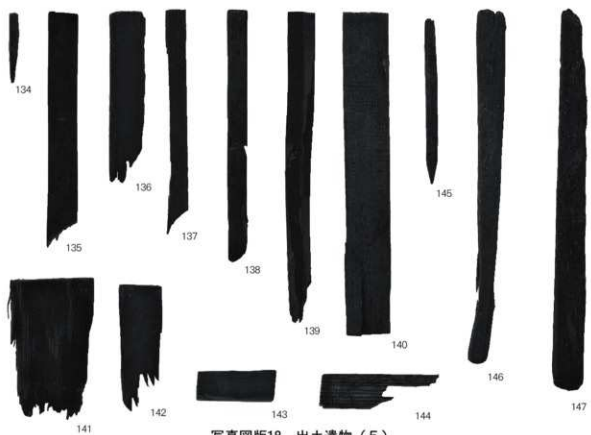
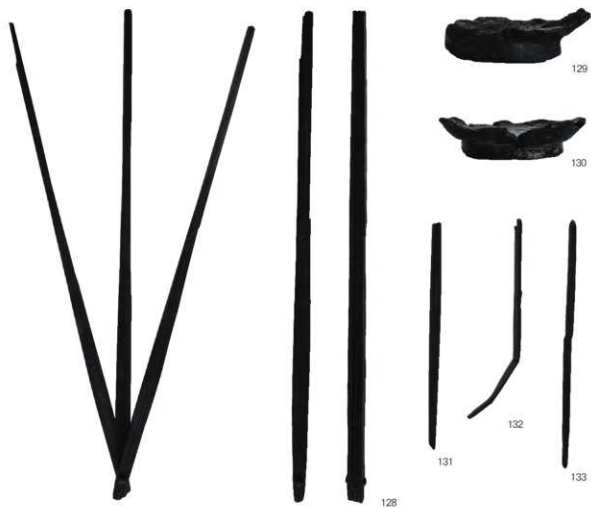
写真図版15 出土遺物（2）



写真図版16 出土遺物（3）



写真図版17 出土遺物（4）



写真図版18 出土遺物（5）



写真图版19 出土遗物(6)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきむりょうこういんあとはつかつちょうさほうくしよ							
書名	特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅴ							
副書名	第36次調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県平泉町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第131集							
編著者名	島原弘征 鈴木江利子							
編集機関	平泉町教育委員会							
所在地	〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地2 電話(0191)46-2111☎							
発行年月日	西暦2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むりょうこういんあま 無量光院跡	いわてけん にしひがひけん 岩手県西磐井郡 ひらいずみちよう 平泉町 ひらいずみあざはなにて 平泉字花立地内	03402	NE76-1007	38° 59′ 27″	141° 07′ 16″	20160801～1117	160㎡	史跡整備 を目的と した内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
無量光院	寺院	12世紀	堀 溝 整地層 柱穴	かわらけ 中国産陶磁器 国産陶器 土師器 須恵器 羽口 土壁 土製品 鉄製品(釘) 木製品(厨骨・箸・椀) 鉄滓 植物遺体等				
要 約	<p>無量光院跡北東側を区画する堀を検出した。堀は無量光院跡造営時に構築され、小規模に造り替えた事が確認された。</p> <p>北側に隣接する柳之御所遺跡でも堀の造り替えがあることから、無量光院跡の造営と柳之御所遺跡の改修に関連性があるのが課題である。</p> <p>堀の埋土中位から厨骨が出土したことは特筆される。また同一層や周辺から木製品や羽口・漆器・鉄滓の出土が目立つ。調査区の北西側で行われた猫間が淵第2次調査では羽口と鉄滓が多く出土しており、ある時期に生産施設が周辺にあった可能性を伺わせるものである。</p>							

岩手県平泉町文化財調査報告書第131集

特別史跡無量光院跡発掘調査報告書XV

—第36次調査—

印刷 平成31年3月27日

発行 平成31年3月31日

編集・発行 平泉町教育委員会

〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地2

電話 (0191) 46-2111 (代) FAX (0191) 46-2015

印刷 川嶋印刷株式会社

〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

電話 (0191) 46-4161